

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, Inc.

# ELEC

# BULLETIN

No. 14

June 1965

巻頭言 読書力	太田 朗	1
英語と日本人	村田 聖明	2
LANGUAGE LABORATORY LEARNING	G. テイラー	6
〔語学ラボラトリー学習〕 訳注・金田正也		
日英両語音声の比較	国広 哲弥	20
特集 ELEC 会館開館式		22
日英両語の自・他動詞の比較	小池 生夫	28
ELEC 研究協力校報告		
水海道中学校の英語教育	山家 保	32
Oral Approach の実践研究	中山満寿男	35
ELEC Forum 私の英語教師としての歩み	荒井 照江	40
ELEC Institute Instructor の横顔		42

GAKKEN



# 読 書 力

太 田 朗

日本人は英語の本はよく読めるが、話す方は苦手であるというのが通説のようである。確かにその通りであるが、それでは読む方は十分かという点、必ずしも楽観を許さない。

私は二、三の大学で、英語専攻の学部の学生に、Gleason の *Introduction to Descriptive Linguistics* や Fries の *The Structure of English* をテキストに使って来た。やり方は、一人の学生に一段落づつ音読させ、その内容を把握しているかどうかをためすためにこちらから日本語で問を發するのである。その際の学生の応答を見ていて感じたことは、それが正しい場合でも、それを發するまでにひどく時間がかかるということであった。理由は、英語の文章を頭から読み下してその内容を把握するというような習慣がついていなくて、一度日本語に直して見て、それをもとにしてあらためて内容を考えるというやうなくせがついているからではなかろうか、と思われる。こういう習慣のついたものは、確かに読めることは読めるが、恐ろしく時間がかかる。読者のスピードということを考えると、このような読み方しかできないのでは、「よく読める」とはいいい難い。一般教養の英語では更にひどいのがいて、そういう連中は、内容把握は二の次で、ともかく横のものを縦にすれば能事了れりと考えているらしい。Tomorrow is another day. に「明日はもう一日である」というわけの分らない日本語をあてがって平然としているのみならず、知らない単語は一つもなかったと安心しているのは、そういう連中である。

読書の際の眼玉の運動を研究した心理学者がいるが、それによると、眼玉が左から右に一語一語を追って（あたかも水泳のクロールの運動のように）絶えず前進している場合は、意味を把握しながら読んでいるのではなく、意味段落をなす数語を一かために、スーと動いては止り、スーと動いては止る（あたかも平泳の運動の如き）運動をしている時は、内容が分る読み方をしているのだそうである。そしてこの一運動で読みとれる語数が多くなればなる程、読書のスピードは増すわけである。一々日本語に直さなければ気がすまない読み方をしている人の眼玉は、前後左右に忙しく動いていることであろう。それでは眼をまわすばかりで、能率的な読書はできない。

相当なスピードで正確に内容を把握するという点から見ると、日本人の読書力についてはまだまだ考える余地がある。理由は今迄に繰り返して述べたから省くが、このような本当の意味での読書力を養うためには、初期において口頭練習で基礎を養うのがよい。そして高校から大学にかけて、多読を奨励し、指導することである。「役に立つ英語」というのは何も会話に限ったことではない。色々の目的で、英語の本や雑誌を読んで、内容を理解できることも「役に立つ英語」であり、そしてそれは英語教育の非常に重要な目標の一つである。

(東京教育大学教授)

# 英語と日本人

——實用主義と教養主義——

村田 聖明

先年ニューデリーで開かれた、ある国際会議に参加して、インドの若いインテリと日本の教育制度について話をしていた時のことである。彼が **What medium of instruction do you use?** という質問をした。

私は一瞬、彼が何を言おうとしているのかと戸惑ったが、これはいうまでもなく、

「日本では何語を用いて学校教育をしているのか」

という意味である。この質問は、戦後独立したアジアやアフリカの諸国が直面している、われわれ日本人の考え及ばない種類の「国語問題」を示唆するものである。

一口にいうならば、これらの旧植民地諸国では、外国人、特にかつての支配者との間に、通信上の問題はないに等しい反面、民族固有の言語を国語として制定し、その普及と実用化を図る上に、多大の困難に遭遇しているのである。

それにひきかえ、わが国は、かつて一度も西欧諸国の植民地であったことがないために、国民全体の外国語の駆使力は、アジアの他の国に較べて甚だしく劣っていると言える。

ペリーの来航に伴う開国以来、外国からもたらされた新しい知識は、物理でも化学でも医学でもすべて、一旦、日本語に翻訳されて、国民一般に与えられた。

文学の分野においても、われわれ日本人にとって、ドストエフスキーや、フォークナーやサルトルを「読む」ことは、決して、これらの作家の作品を、それぞれの国語で読むのではなく、日本語に翻訳されたものを読むことなのである。

数年前、ある若い女流作家の小説が賞を受けたあとで、それが少なくとも部分的には、フォークナーの作品の剽窃であることが判り、受賞決定は取り消されたことがある。その女流作家がある新聞に語った弁明のことは、実に意味深いものであった。それは、

「私はフォークナーの作品を愛読し、文章をそらで覚えている位なので、ついそれが私の文章の中に出て来てしまったのです」

という意味のことだった。その見本として新聞記事の中に引用され、比較されたのはいうまでもなく、フォークナーの文章、つまり原文ではなく、ある日本語訳の一部であったのだ。

この挿話が示すように、国語を異にする民族間の意思の疎通を妨げる言葉の壁の存在を意識しないほどにまで、わ

れわれは、この「壁」の内側の生活に馴れてしまっているわけである。

ということは、日本人の中に、この壁を乗り越えた人が極めて少ないということを意味する。

外国語との接触が、外国文学についてのみである限り、問題はさして重要ではない。

しかし国語を異にする民族間の、人間対人間という接触の機会、現代における通信、輸送の技術の発達に伴って増加している。そこに、関係個人が、ことばの壁を乗り越えねばならないという必要が生まれてくる。

戦後の日本で外国語教育、特に英語教育について深い反省が行なわれ、それに従って、学校における英語教育の改善のための諸策がとられてきたのも、このような状況の変化に、関係者が気付いたことにほかならない。

二人の人間がことばを用いて相互に通信を行なう時、そのことばの媒体は通常、文字ではなくて音声である。

このことはしかし、人間の言語活動において、書きことばの方が、話しことばよりも、圧倒的に重要であるということにはならない。文字を持たないような未開民族は別としても、人類の存在する限り、ことばは、音声のみならず、文字にも依存して表現されるにちがいないからである。

そもそも、人間のことは、その発生においては、話しことばに限られていた。そしてまた、空気の振動によって音声を伝えるという手段は、その性質のゆえに、通信可能範囲を極めて限られたものにした。

ことばの媒体としての記号、すなわち文字の発明は、人間の通信の範囲を、空間的にのみならず、時間的にも、無限に増大したのである。文字に思想を託することによって、人間は、地球上、遙かに離れた二つの地点の間に通信を行なうことができるし、数千年前の人間の書き残した思想を知ることでもできる。われわれの思想を何千年も後の子々孫々に理解させることができるのも同様である。

また、印刷技術の発達は、文章の大量複数化を容易にした。その最も顕著な例が新聞である。たとえば、日本の一流全国紙ほど、多量の情報を短時間に、多数の人間に配布する機関は他にないだろう。これはひとえに、ことばが音声ではなく、文字によって表現されるからこそ可能な現象である。たとえば、一日の新聞が盛るだけの情報を全部、音声によって、同じ数の人間に伝達することに伴う困難を考えれば、書きことばの、現代における役割の重要性が理

解できる。

もちろん、最近の技術の進歩は、話しことばの保存と再生とを容易にした。録音テープの発明がそれである。これによって、われわれは、たとえば、在来の手紙の代りに、同じ内容を音声にして、遠くの友人に送ることができるし、現代のわれわれの思想を録音して後世の人間に遺すこともできる。

しかし、予見し得る将来においては、たとえば、保存された話しことばを、好きな時に、好きな場所で再生することが、書きことばと同様に簡易になることはまずないだろう。仮りに、イギリスのある小説家の作品が一卷のテープに収められたものと、その同じ作品が一冊の本として印刷されたものとを比較して見ればこれは明らかになる。

以上のように考えてみると、文明国の人間の言語生活における、話しことばと書きことばの重要性は、いずれが大で、いずれが小ともいい難い。

これは自国語についてのみならず、外国語についても言えることである。ここに、日本における英語教育の、いわゆる筆述法と口頭法との比較的価値についての考え方の基準が見出されるはずである。

戦後、英語教育について屢々行なわれた批判は、従来の語学教育が訓古学的に過ぎたことの反動として、口頭法こそ、唯一の正しい接近法であるということである。少なくとも、俗にいう「生きた英語」とは、耳から入る英語、口でしゃべる英語であるという考え方が広まったのである。

改めていうまでもなく、これは間違いである。すでに述べたように、話しことばも、書きことばも、それが現代の人間のものである限り、「生きた」ことばである。両者の相異は、表現の媒体が音声であるか、文学であるかだけに過ぎない。

ただ、一つの国語を外国語として用いようとするものにとって、もう一つの大きな相異がある。それは、話しことばを理解し、話しことばによって自己を表現することに必要な、その国語についての習熟度は、書きことばの場合に較べて、遙かに高いものであるということだ。

文字になった文章を読んで理解することは通常、一瞬のうちに行なう必要はない。場合によっては、一節の文章を読むのに、数時間をかけて、味わってもよい。古今の名言などは、何度も繰り返し読んで味わうところに意味があるわけである。しかし、同じ文章が音声によって表現される時には、その最後の一語の発音が終わった時に、文章全体の理解ができていなければいけない。つまり、即座に理解する能力を必要とするのである。

同様に、自分の思想を文字で表現する時には、許される限りの時間と日数をかけて、推敲を重ねた文章を作ることができるのに反し、音声による場合には、一定の早さで一定の短時間内に、作文を終えなければならないのである。

しかも、音声による表現について、特に重要なことは、発音がある程度の正確さを持たねばならないということである。つまり、外国語の単語を音声で再生する時、その音

の構造が、基準となるものからあまりにかけ離れている場合は、相手の理解は非常な困難を伴うことになり、表現する方の人間の意図が達せられない可能性も生まれて来る。

同時に、相手の発音を聞く場合にも、単語の正確な発音の知識がない者は、一語一語を認識できないために、文章全体の理解が不可能になる。

同じ思想を表現するのに、仮りに、Aは五時間かかって五百語の文章をものするのに対し、Bは即座に同様の文章を作ることができるとした場合、後者の語学力は、前者に較べ、遙かに秀れていることはいうまでもない。

したがって、「私は英語はよみかきは楽にできるが、会話はやれない」という人は、あたかも、「よみ書き」と「会話」とが、語学における全く、異なった種類の能力を必要とするかの如き口ぶりをしているわけであるが、事實は、当人の語学力が、「会話」の出来る人間よりも、遙かに低いということに過ぎないのである。

しかしここで、もう一つ重要な問題が起こってくる。それは、一般に考えられている、英語の「会話」の意義と、その価値である。

戦後日本の英語教育が、従前なおざりにされていた、話しことばを重要視するようになったのは、過去の欠陥を補うという点で正しいと言える。しかしこれは同時に、「生きた」英語を身につけるためには、いわゆる「会話」の術を会得すればよいという謬見をも生んだのである。

これが何故謬見であるかということ、この考え方は、人間の言語生活の中に、「会話」という特定の分野があり、そこでは、一定の特殊のことばが用いられるという前提に立っているからである。

ところが実際は、すでに原則的に述べたように、現代文明社会の人間の言語活動には、話しことばと書きことばの二つの面があるに過ぎず、両者のことばそのものは、全く同一種類のものなのである。

したがって、二人の人間の間に行なわれる口頭法による自己表現そのものを「会話」と呼ぶなら、「会話」とは、人間間の、音声による通信そのものに過ぎないのであって、決して、特定の言語活動ではない。

反面、「会話」が、たとえば、一人の一般人と商店員、医者、タクシー運転手などという、種々の職業の人間との間に行なわれる、口頭法による通信を指すのであるならば、その内容は、人間の言語活動の、極く初歩的な、小部分に匹敵するに過ぎないのである。

要するに、本当の意味の会話は、これに参加する人間自身が、発表し、伝達しようとする思想や意志を持ってはじめて行なわれるものであって、「会話の術」がまず存在して、これをあやつる者が現れてその後「会話」が生まれるものではない。

それは丁度、いくら料理法に長じても、料理に用いる材料がなければ、意味がないのと同様で、食物を必要とする人間や食物となるべき食品がまず存在して、そこに調理法の必要が生じるのであって、その逆ではないはずである。

したがって、真の意味で外国語の「会話」に長じるということは、いかなる状況においても、音声を用いて自己の思想と意志とを相手に伝え、相手の意志と思想をも、正しく受けとることができるということに過ぎない。そこには当然ながら、状況は同じであっても、六十才の学者と、十六才の少女との間には、口頭で表現される意志と思想にはしかるべき相違があるはずで、決して規格化された文章ではないのである。

戦後の傾向として、「役に立つ」英語、「実用」英語の力の必要性が強調され、しかるべき訓練方式や機関が考案され、組織されて来たのであるが、これに対抗する考え方も現れた。それは、日本人にとっての英語の力は、「教養」に過ぎず、また、「教養」としてのもので充分であるというものである。

ここで仮りに「実用主義」という概念と対照するものとしての「教養主義」というものを設定して考えて見よう。この立場は要するに、われわれが外国語を習う目的は、その語学力を用いて、外国人と「会話」を行なうことや、通訳をすることではなく、ただ、日本以外の国の中には、われわれが「いぬ」とよぶ動物を dog と呼ぶ民族もいるのだ、ということを知るだけでよいのだということのようである。

たしかに、こういう考え方も成り立つだろう。それはたとえば、われわれが、古代ギリシア語や、漢文を習っても、そのために、今日のギリシア人や、今日の中国人とは「会話」を行なうことは出来ない。ただ、二千年前の地球上の一部には、こういう思想を抱いて、こういう生活をした民族がいたのだということを知るに止まるのである。

同様の知識は、あらゆる国についても、あらゆる時代についても得ることは出来るだろう。しかし問題は、そのような「教養」のために、今日の時代に生きる人間が、その限られた生活時間の、どれほどを割くことが出来るかということである。

人間が必要とする教育の中味は、時代とともに変化する。百年とまでいわなくても、五十年前の日本人が、良き生活をするために必要とした知識と技能の種類と程度は、すでに今日という時代には不適當になっている。当時の日本人が知っていた多くのこと、身につけていた多くの技能は、今日のわれわれにはすでに無用となっている。同時にまた、五十年前にはその必要性が、夢想だにされなかったような知識や技能が、1960年代の日本人には重要になっているのである。

その一つが、外国語、たとえば英語、を駆使する能力である。いいかえれば、今日では、英語を「教養」としてのみ理解することが不都合なのである。英語を「教養」として扱うことができる余裕のある人も、それとは別に、実際的な技能としての英語の力を身につけなければならない時代になっているといえよう。

つまり、「教養」としての英語と、実技としての英語は、全く別個のものとして考えねばならないのである。それは、

たとえば、一人の若い女性が、趣味として日本舞踊を習いながら（日本舞踊にも実用的価値はあるが）一方では、生活の手段としてのタイプ技術を身につけると同様である。

しかしここで誤解を避けるために明らかにしなければならないのは、「実用的な英語」の意味である。これは決して、職業としての英語をさすのでもなければ、「会話」を指すのでもない。ここでいう「実用」とは、人間生活の中における、言語の機能を理解した上での、英語を用いる能力を指すのである。つまり、「実用英語」とは、人間間の広い意味での通信の手段としての英語である。

当然のことながら、それは、話しことばとしてのみの英語でもなければ、読みかつ書くだけの英語でもない。現代、英語を母国語とする民族のみならず、外国語としての英語を使用し得る民族との情報の授受の媒体としての英語を指すものである。それは状況により、あるいは文字を用いて、あるいは音声によって表現される。

このような意味の英語の能力は、特定の職業の日本人にだけ必要なのではない。われわれが英語を駆使することは、それ自体が目的ではなく、手段に過ぎないのである。それは、ことばというものがそもそも、手段であるからだ。

今日のような時代においては、いかなる職業の日本人も、いつ、外国語によって意志を表現し、情報を吸収する必要に迫られるかも知れない。英語とは全く縁がないと考えられる、伝統的な日本の芸術や技術に秀でる人が、その人たちの技術が伝統的であるがために、海外に出て、その技術を示すことを要請されることが多い。

しかし、交通機関の発達した今日では、日本にやって来る外国人の数も、30年前とは較べることが出来ないぐらい増えている。従って、われわれが、自国にいながら、日本語を理解しない外国人に接触する機会も、極めて多くなっているわけである。

ここに、国民の一人一人に、日本を正しく外国人に知らせるという責任がかかって来る所以がある。

Aという国について、Bという国の国民の大多数が抱く映像は、究極的には、A国の国民的利益と関係がある。通常の場合、その映像が、現実に近いものである方が、そうでないよりも、A国にとっては有利であるといえる。

A国についての映像、あるいは印象は、B国民に与えられる文字及び画像によって作られるが、その中でも、B国の新聞記者その他の報道関係者や学者が、A国を訪れて、観察した上で書き、公表する情報が果たす役割は大きい。しかも、彼らが求める情報の提供者が、A国民そのものであるからには、両者の間で、通信がいかに行なわれるかが、究極的に、A国民自体の利益に及ぼす影響も極めて重大である。

そこで、日本を訪れる外国人（日本語は出来ないものとして）と接触する日本人が、たとえば英語を通じて、どれほど正確に情報を与えることが出来るかが問題になってくる。

日本に関して外国人が書いたものの中には、荒唐無稽な

事実の間違が多いが、その原因の主要部分は、それら外国人と、彼らと接触した日本人とが、ことばの壁にわざわいされ、両者の間に、正確な情報の伝達が行なわれなかったということにあると思われる。

いささか落語めいた話ではあるが、実際の例に次のような話がある。戦前日本で英語の教師をしていたイギリス人が、ある日、日本人の友人に誘われて食堂に入り、非常にうまい日本食を味わった。それは肉のようでもあり、魚のようでもあり、いずれとも見当がつかなかったが、とにかく、今までかつて食べたことのない珍味であった。そこで、日本人の友人は、「これは何ですか」と尋ねると、その日本人は、英語で何と申すか、思い出せない。It's a very elusive creature. だという。大分苦労したあげく、やっとその単語を思い出した。Serpent だというのである。客は

度肝を抜かれて、折角うまいと思って食べた食事でもまずくなるのだが、結局、この日本人は eel ということばを思い出せなかったためにこういう喜劇が起こったのであった。この場合は後に正しい情報が伝ったからよかったが、そうでないこともあり得るわけで、日本が海外に誤り伝えられるのは、このような簡単な誤解の蓄積によるのであろう。この例が極めて寓話的に示すように、「実用英語」とか、「生きた英語」とかいうものも、本質的には意味のない概念である。われわれは、「実用性」とか「会話術」とにとらわれずに、現代の世界における通信の媒体としての英語そのものを、できるだけ正確に駆使することを目指して、研修にはげむべきであろう。

(ジャパン・タイムズ・ウィークリー編集長)

1962年以来、ナイジェリア政府はユネスコの援助を受けて国語運動を実施している。一般に成人教育には国際語よりも、アフリカの原地語で読み書きを教えることが第一であると言われている。子供達は学校で公用語であるフランス語の読み書きを教えられている。しかし母親のひざの中でアフリカ語に馴れ親しんできた子供達にとって、これはすでに困難なことである。まして成人教育になると非常に難しいことになる。

ラクロー氏が紙の上に生き返らせようとしている五つの言葉はハウザ、プール、ソナイ・ジュルマ、タマシク、カメリである。最初の三つにはほとんど同じアルファベットが使えサハラ地域の遊牧民族が話している。あとの二つには少し修正を加えれば使える。これらの言語の文字化は国語運動に役立つばかりでなくナイジェリア政府が熱心に行なっている、15世紀以来これらの言葉で語り伝えられてきた文学、詩、歴史物語の保存にも貢献することをラクロー氏は指摘している。

#### ヨーロッパ語よりもさらに表音的

サハラの半砂漠地帯で生活した経験のあるラクロー氏は、仕事に対して新鮮な、科学的な接近方法を持っている。彼は語っている。

「これまでアフリカの言語は伝道者、言語学者などによって文字に書き換えられてきたが、それはだいたいヨーロッパ式の表音方式を使用するので、時々もとの音と変わって書かれてしまう。その上、イギリス人が書き換えたか、フランス人が書き換えたかで違いが出てくる。たとえばイギリス人は Hausa、フランス人は Haoussa、と書き表わすように。アフリカの言語はヨーロッパの言語より活用が多く、さらに表音的であり、いくつかの独特な音がある。活用と抑揚は非常に重要

なものである。同じ音の組み合わせが、発音と、特に抑揚の違いで、異った二〜三の物を表わす。例えば、ハウザ語の Gindi という単語が最初の音節を高い調子で発音した時には「基礎」という意味を表わし、低い調子の時には「足かせ」という意味になる。こういうわけで、アフリカの言語を純粋なヨーロッパ書式で完全に書き表わすというのは明らかに不可能である。」

アルファベットを創るに当ってラクロー氏はバシー方式として知られる、国際表音文字協会が考案した国際的標記法の使用を提案している。これはラテン26文字をもとにしアフリカ特有の音を表わす約半ダースの文字を加えたものである。例えば、<sup>h</sup>B、は普通の Bee、という音を表わすが、<sup>h</sup>B、

共同体の中に育った文化的融合に十分なものである。

#### 3 千語の基礎辞書

ラクロー氏は書き換えの仕事を完成するためナイジェリアで3カ月を過ごすことになっている。つづいて彼はナイジェリア政府に協力して、国語運動の期間中の基礎的指導のために、ハウザ、プールソナイ・ジュルマの三主要言語のおおの3千語について、その綴字と発音の辞書を作成することになっている。ラクロー氏によると、これら3千語は日常生活に使われる全ての言葉の90%に及ぶということである。教師はこの辞書によって単に各単語をどのように綴るかがわかるばかりでなく、発音が違うと、とりわけ抑揚が違うと即ち意味が異なるかを理解することができる。

時代に合わせてラクロー氏はこの辞書に、飛行機・汽車・電気といった他国語から入ったいくつかの言葉も加える予定である。「ハウザ人は飛行機・汽車を意味する彼ら自身の言葉をすでに持っている。」とラクロー氏は述べている。

この国語運動にも共通した本質的な要素の一つは、新しい読み書きのできる人々のための適当な読み物を与えるという問題である。しかし、言葉を書き換えるためにラテン文字を使用することによって読み方を習ったばかりの大人のために、簡単な読み物と新聞に特別のページを作る印刷設備も整えられるであろう。

これはアフリカで書き言葉を作るために、ユネスコに援助を要請した最初であるが、ラクロー氏にとっては、新しい経験ではない。彼はすでにカメルーンやマリで同じような仕事をしている。しかしそれらは単に科学的な目的だけのために行なわれたものであり、今回のように、国民教育のために土着語を文字化する試みは、ラクロー氏にとっても初めてのものである。(ユネスコ新聞より)

## アフリカ五カ国語のための 新アルファベット

にかぎをつけた場合には、ほとんど声門を閉じて喉で発音する音を表わし、D・C その他いくつかの文字についても同様の扱いをする。ラクロー氏は、また、アフリカ言語にはアラビア語と良く似て、喉のうしろで発する声門音が非常に多くあることを指摘している。

彼は、ナイジェリア付近で話されているハウザ語は既に40年前、バシー・アルファベットのいくつかの文字を使って書き表わされていると述べている。「しかし10%、あるいは20%。離れると方言が異なるナイジェリアのハウザ語に、このアルファベットを使用することは困難である。その上、ナイジェリア方式はある種の音、特に子音の標記法がなく、母音の長さや抑揚を示すことができない。それに、ハウザ語は発展・成長し、今までに書き表わされていない新しい言葉がたくさんであると同時に、我々の言語学上の知識もかなり発達した。しかしながらバシー・システムは、二国のハウザ

# LANGUAGE LABORATORY LEARNING

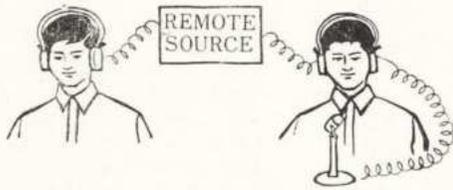
(2)

Grant Taylor

Any commentary on language laboratory work is necessarily dependent upon an understanding of the basic types of installations and arrangements for use. Regarding equipment, there are essentially only two types: (1) equipment

that only permits the student to listen, and (2) equipment that permits the student to listen and to record. The following chart will illustrate these two basic types with the most significant variations within these categories.

## TYPE 1 NO RECORD



Remote source  
Simple headset



Remote source  
Audio-active headset



Individual source  
Simple headset



Individual source  
Audio-active headset

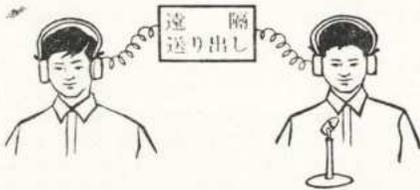
## 語学ラボラトリー学習 (2)

訳注 金田正也

語学ラボラトリー学習を論じるにあたっては、どのような設備を使いどのように組み合わせるかについて基本型式を理解しておかねばならない。装置に関しては、本質的には2つの型式があるにすぎない。すなわち、(1) 学生に聴

取させるだけの装置、(2) 学生に聴取し録音させ得る装置の2つである。その基本2型式と、この分け方での変型の中で最も大事なものを次に図解する。

### 第1型式 録音機なし



遠隔送り出し  
ヘッドセット<sup>1)</sup>のみ



遠隔送り出し  
オーディオ・アクティブ・ヘッドセット<sup>2)</sup>

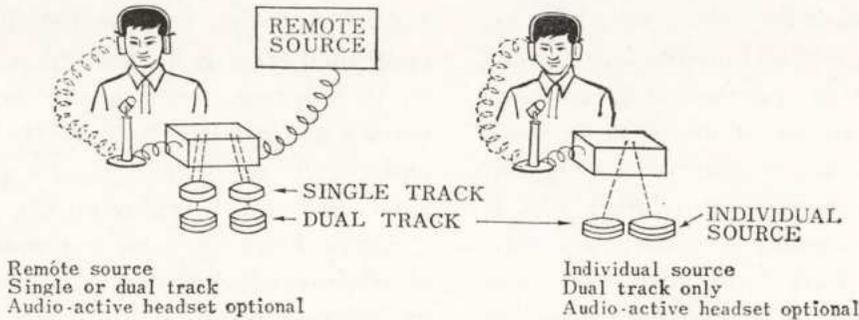


再生専用  
録音不能  
個別送り出し  
ヘッドセットのみ



再生専用  
録音不能  
個別送り出し  
オーディオ・アクティブ・ヘッドセット

## TYPE 2 RECORD



In the type (1) installation, the student is not provided with recording equipment, only a headphone or a headphone made "audio active" through connection with a microphone. The latter is preferably provided with volume controls for headphone input and/or microphone output. The student may hear the master voice from a remote source and have no control over the rate or manner of reception, or he may also have a record or tape player available at his position or remotely, in which case, the student can not only hear the master voice but can also replay parts or stop at any

particular point.

Type (1) equipment can be used (a) for simply listening conversations, lectures, plays, radio newsreports, songs, etc; (b) for listening requiring additional non-oral activities such as selection among items, testing audio discrimination, diction, note taking, etc.; (c) for listening and speaking during a recorded pause or during a pause created at the student's own discretion. If the student is to speak using type (1) equipment, there is general agreement that the audio-active microphone-headphone type of arrangement is definitely preferable;

## 第2型式 録音機あり



第1型式の設備には学生用の録音装置はなく、ヘッドホンのみ、またはマイクロホンをつけて「オーディオ・アクティブ」にしたヘッドホンのみがある。後者には、ヘッドホン入力および、またはマイク出力の音量調節器がついていることがのぞましい。学生は離れた所にある送り出し装置からの教材の声を聞けるが、受け入れの速さや方法は自由に

ならない。あるいはまた、レコード・プレイヤーかテープの再生専用機を学生が手もとで、または遠隔操作で使えるようにもできるが、この場合学生は教材の声をただ聞く一方ではなく、部分部分を反復再生したり、自由に止めたりもできる。

第1型式の装置の使い方としては、(a) 会話、講義、演劇、ラジオのニュース、歌、などを単に聴かせること、(b)

two principal reasons for this are the following: first, listening to oneself speak while using ordinary headphones limits one to hearing largely through bone conduction, eliminating normally present air conduction, thus reducing the accuracy of self-monitoring second, with an audio-active microphone-headphone there is a greater apparent loudness to one's own voice (which can be increased even further if a volume control is provided), and a number of recent studies seemingly indicate, as many teachers have long suspected, that one's ability to hear one's own variations (or errors) in speaking is actually increased over normal ability through this simultaneous "feedback." In the type (2) installation, the student is provided with a tape recorder at his position (or remotely in some instances; the student's headphones can be audio non-active or audio active. Preferably the student's headphones will be audio active for the same reasons given above, but surprisingly, a high percentage of the obviously more expensive type (2) installations the author has seen have *not* provided for audio active headphones whereas the reverse has been true in type (1)

幾つかの項目中から選ばせたり、聴き分けの力をテストしたり、書き取り、ノート取りなど、非口頭的な活動を別に要求しつつ聴かせること、(c) 聴かせておいて、録音教材中に設けてあるボースの部分で、または学生が自分で自由にボースを設けつつ言わせること、などである。第1型式の装置を使って学生に言わせるのであれば、ヘッドホンにマイクを配したオーディオ・アクティブ型のものでどうしてもほしいということが広く認められている。その主な理由は次の2点である。第1に、ヘッドホンを使っている最中に聴く自分のはなし声は大部分骨を伝わってくるものに限られてしまい、普通に存在する空気伝播が欠くので自己検聴の正確さが減少する。第2にオーディオ・アクティブのマイク・ヘッドホンを使えば、自分の声が大きくはっきり聞こえる(音量調節器があればなおよくなる)。これは最近の多くの研究が指摘しているようであり、また以前から気づいていた教師も多いのであるが、自分の話し方が変型(または誤り)であることに気づく能力は、この同時「フィードバック」によって明らかに普通の能力以上に増大する。第2型式の設備では、学生には自分の席に(または離れた所にある場合もある)テープレコーダーが備えられ、学生用

installations.

Obviously, with the type (1) installation, the only kind of self-monitoring possible is simultaneous monitoring. "Listenback" or "playback" to confirm a suspected but not definitely confirmed error is not possible. With the type (2) installation, the student records his responses along with those of the master voice and can listen to both voices any number of times by merely replaying the tape.

For at least the past ten years, a great deal of controversy has centered around recording vs. not recording, and the issue is by no means settled yet. Those who oppose recording offer the following arguments:

(1) The cost of type (1) installations usually range from only 10% to 40% of the cost of type (2) installations. (The wide range of costs given here is due to other cost variables such as student booths, student microphones, student players, and especially control source.)

(2) It is difficult to hold combined tape and live-voice classes with type (2) installations.

(3) Most important, critics say, students cannot hear their own errors. The greatest value comes from the constant attempt at imitation;

ヘッドホンは聴取専用とか、オーディオ・アクティブとかである。前述の理由により、できればこの学生用ヘッドホンはオーディオ・アクティブにしたい。意外なことに、明らかに高価な第2型式の設備の中で筆者の今まで見て来た少なからぬものがオーディオ・アクティブのヘッドホンを備えておらず、一方第1型式の設備はその逆であった。

第1型式の設備でできる自己検聴の型式は同時検聴に限られることはいう迄もない。気はついていても、はっきりどう違うのかその違いを確かめるために、「再聴取」や「再生」することはできない。第2型式の設備では、学生は教材の声と共に自分の反応も録音して、あとでテープを再生しさえすれば何回でも両方の声を聴くことができる。

学生に自分の声を録音させるかさせないかは、少なくとも過去10年間多くの議論的であり、まだ結論に達してはいない。録音させることへの反対論者は次の理由をあげている。

(1) 第1型式の設備の価格は通常、第2型式の設備の10%ないし40%ですむ。(この価格巾の広いのは、学生用ブース、学生用マイク、学生用再生機、そして特に送り出し側の制御装置など、他の価格要因によるものである。)

even if errors occur, they will be more quickly corrected by constant additional active mimicry than by passive self-criticism through listening back. In this sense, they say, non-playback more nearly resembles regular classwork, where of course, there is no "playback."

(4) Finally, critics say, by listening back to his recorded lesson, the student hears all the mistakes he originally made (which according to the previous point sound correct to him), and he thus *reinforces* the errors, increasing the chances that the errors will be repeated.

Contrarily, those teachers who support the value of recording in type (2) installations offer the following arguments:

(1) The student is less passive in that he must speak audibly, must respond in each case because failure to do so will be documented on the tape. This automatically forces the student to be more self-critical, to participate more enthusiastically. There is, too, the point that at any time, the teacher or monitor can request to listen to the student's tape, thus having a tangible record of student performance—much as an examination paper.

(2) 第2型式の設備では、テープと教材、なまの授業を併用することが難かしい。

(3) 最も批判を受ける点は、学生は自分の誤りに気がつかないことである。まねようとして絶えず努力するところに最大の価値があるのであって、まちがいを起しても、それを聴き返して受動的に自己批判するよりも、積極的に口まねをさらに続ける方が、より早くその誤りは矯正をされるであろう。批判論者の言によれば、この意味においては、学生の自分の声を再生しないやり方は、普通の授業に似てくる。授業ではもちろん再生などはない。

(4) 最後に批判される点として、自分の録音したものを聴き返すことによって、学生は自分がつくり出したまちがい(前の点よりすれば、それはその学生には正しいものときこえる)を常時聞くことになる。こうして、その学生には誤りの方が強化され、誤りをくり返す機会の方が増大する。

これに対して、第2型式の設備による録音の価値を支持する教師たちは次のように論じている。

(1) 学生は、よくきこえるような声を出して各場合に

(2) If there was any uncertainty in the student's mind as to whether or not he committed an error in the press of recording, he can check himself and make certain through playback.

(3) Criticizing as a listener or observer with ample time for scrutiny is always, in any life activity, easier than criticizing in as a participant with only a brief moment to do so.

(4) Most important however, supporters of recording maintain, while a student may not be able to criticize his own errors as precisely as a trained linguist could; he *must* develop a gradually increasing ability to detect his own errors in sound pattern and general structure; if he cannot develop this ability, he will not be successful in learning the language despite all efforts on the part of the teacher.

In attempting to choose among the various types of installations naturally much will depend upon the particular needs of the language department and its philosophy and approach. However, there are realistic considerations. Even with an inexpensive type (1) installation, effective language laboratory work

答せねばならぬ、失敗すればテープに証拠として記録が残るといって、いっそう積極的になる。こうして学生は自動的に、いやでも自己批判的になり、より熱心に参加せざるを得なくなる。また、教師や検聴者(monitor)はいつでも学生のテープを聴かせてもらえるので筆答試験同様に学生の成績を明確に記録することができる。

(2) 次々に録音していくうちに、誤りをおかしたのではないかといった不安が少しでも学生の心に起れば、再生して自分で点検し、たしかめることができる。

(3) 聴く、あるいは観察する立場で、詮索に十分時間をかけてする批判というものは、人生いついかなる場合にも、今それをしている最中に瞬間に批判することよりも容易である。

(4) 録音賛成論者は最も大事な点を次のように主張する。学生は、訓練を受けた言語学者のように正確に自分の誤りを批判できないにしても、音声の型や一般構造中の自分の誤りを発見する能力を少しずつ伸ばして行かねばならない。もし学生にはこの能力は伸し得ないとすれば、教師の側でいかに努力しても、その学生の外国語の学習は成功しないであろう。

can be carried out, contrary to what some teachers are inclined to think. Most certainly there are many schools where the difference between a cost of \$10,000 and \$25,000 to \$100,000 for a fifty-position laboratory would be highly important. From a practical standpoint too, it should be kept well in mind that annual service and maintenance costs increase proportionately with the degree of complexity of the equipment. There is another important point which teachers and school administrators, in the excitement of installing a new language laboratory, sometimes forget: the problem of obsolescence with electronic equipment. Generally speaking, it is probably accurate to estimate that the maximum "life" of equipment in a heavily-used but well-maintained laboratory is approximately six years. By that time, gradually all of the equipment will have been replaced.

At this point, it is perhaps important to comment briefly on the difference between single-track and dual-track recorders in the type (2) installation since a good number of teachers are not aware of the limitations and potentialities of each. Indeed, in the author's ex-

いろいろの設備型式の中から何を選ぶのがよいかは、その外国語科の特殊な要求やその教育観、指導法によって大きく左右されるのが当然である。しかし、実際に考慮すべき問題がある。えてして考えられる所とは逆に、金のかからない、第1型式の設備によつてすらも、語学ラボラトリーの作業は効果的になしとげ得るのである。多くの学校にとっては、50人用のラボラトリーが1万ドルするか、それとも2万5千ドルないし10万ドルもするかといった違いは由々しいことであるに相違ない。実用的見地からしても、設備の複雑さの度合いに比例して、その年間補修経費が嵩むこともよく心得ておかねばならない。教師や学校当局者が、新しく語学ラボラトリーを設置するのに気おい立っている時に忘れ勝ちのもう1つの重要な点は、電気装置の廃化の問題である。普通、ラボラトリー内の器具の寿命は、使用頻度が高いがよく手入れされるといふ状態で最高約6年とみてまず間違いのないであろう。それ迄の間には全装置は漸次入れ替えられることになる。

ここで、第2型式の設備中の1トラック録音機と2トラック録音機の違いについて簡単にふれておくことが必要のようである。案外多くの教師が、その各々の限界や可能性

experience, most teachers regard dual-track recording equipment necessary for, or even synonymous with a "language laboratory." This, of course, is patently incorrect as the preceding comments will show. Here, it should be re-emphasized that excellent work can be and is being done with the simplest kind of equipment. In this connection, Morton states; "...not too long ago, any room containing a tape recorder or a phonograph and set aside occasionally for use of language students was designated generically as a Language Lab. Recently the terms has become more exclusive. Today, more and more, the designation of "Language Laboratory" implies not only the physical installation itself but, more important, the systematic use and *pedagogical exploitation* of the installation; essentially, it has ceased to refer to a purely physical or architectural adjunct and has begun to imply an instructional system through which the existing equipment is pedagogically integrated within the language teaching program of the academic courses utilizing it. Installations of mechanical and electronic equipment existing only for auxiliary or extracurricular language activity,

に気づいていない。事実、筆者の体験ではほとんどの教師が2トラックの録音装置を不可欠と思ひ、「語学ラボラトリー」の同義語とすら考へている。いま述べたことよりして分る通り、もちろんこれは明らかに間違いである。ここでもう一度強調したいことは、最も簡易な型式の装置でもすぐれた学習ができ、又事実なされていふことである。この点に関して Morton (原注4) は次のように述べている。

「……数年前には、テープレコーダー1台、又は蓄音機1台のある教室で、それを時々学生に使わせている所は一般に語学ラボと呼ばれてゐた。近年その言葉は、より独特な意味を持ち出した。今日では更に加へて、「語学ラボラトリー」と称することは、物質的な装置そのものだけでなくもっと大事な、その装置を体系的に且つ教授法をともなつて利用するといふ意味を含んでいる。本質的には、単に物質的または建築上の付屬物を指示するのではなく、1つの指導体系を意味し出した。そこに存在する装置は、それを使う学科目の外国語教授計画中にそれを通して、教育的に一体化しているといふ指導体系である。正式の授業計画の一環としてでなく、単に補助的にまたは外国語の課

not part of a formal teaching program, are more and more being described as "practice rooms", "Language Centers" or "audio rooms" ...and not specifically as Language Laboratories. Obviously, the distinction is not one of equipment but of use. Some quite legitimate Language Laboratories today consist only of a single tape recorder and a series of earphones and are situated either in a special area or in a regularly used language classroom. What justifies for these rather 'primitive' installations the title of Language Laboratory is that each is used systematically as a teaching, drilling or testing device within one or more of the language programs of the particular institution."

Dual-track equipment is naturally the most expensive type of equipment should not be purchased unless its additional potentialities will be utilized. The most common misconceptions among teachers regarding the necessity for dual-track equipment arise from the following situations:

(1) The student (or a class of students) is to hear one exercise with a master voice and either repeat after or respond orally to this

外活動用に設けてある機械的乃至電氣的装置のある設備は、「練習室」「語学センター」「オーディオルーム」などと言われ出して、特に語学ラボラトリーとは言われなくなりはじめた。明らかにこの区別は装置の区別でなく、用法のそれである。今日、まさしく語学ラボラトリーと正當に言えるものの中には、1台のテープレコーダーと、1連のイヤホンだけより成るものがあり、それは特別教室であってもよいのである。この種のかなり「原始的」設備でも語学ラボラトリーと名づけうる根拠となるものは、その学校の外国語授業計画の中に教具として、またドリルやテストの道具として、各々が体系的に使われていることにある。

2トラックの装置は当然最も高価なもので、その可能性のふえた点を活用するのでなければ購入すべきでない。2トラックの装置が要るかどうかどうかということで教師の間に誤解の生ずるのは次のような場合である。

(1) ある1つの練習教材をかけて、学生(またはクラス全員)にその教材の声を反唱させるか、またはそれに口頭で反応させる場合である。この練習をしばらくした後で学生は自分のテープを巻き戻し、自分の録音した声と教材の声、または教材中の正解とくらべるとする。この場合教材

voice. After doing this for a specific period of time, the student is then to rewind his own tape and listen to his own voice and compare it with the master voice or the master correction. The master voice can be played into the student's booth from the control room while he records. A dual-track recorder is *not* require in this situation.

(2) A number of students are to use the laboratory, and five different recorded tapes will be needed. The procedure is to be the same as (1) above. If the master control source is provided with five master output sources, then these five tapes can be played into the proper booths, and the situation is the same as (1) above. A dual-track recorder is *not* necessary.

(3) A number of students are to use the laboratory at varying times, using different tapes, proceeding at their own pace. If recording is *not* required, the students can take master tapes to their booths and use the technique of simultaneous self-monitoring. A dual-track recorder is not necessary simply because students work individually and at their own pace.

の声は、学生が録音している間はコントロールルームから各自のブースに送り得るのであるから、この状況下では2トラックの録音機は必要としない。

(2) 多勢の学生がラボラトリーを使うとして、そこに5種類の録音教材が必要になるとする。学生の練習方法は上記(1)と同じである。もし指導制御卓の方に5種類の教材送り出し装置を備えていれば、この5本のテープを再生して所要の学生ブースに送り出す。そうすれば状況は前記(1)と同じことになり、2トラック録音機は必要でない。

(3) 多勢の学生がまちまちの時間にラボラトリーを使い、それぞれ異なったテープ教材を用いて自分に合う速度で進むとする。学生が自分の声を録音することを命じられていない場合には、学生は教材のテープを自分のブースに持って行って同時自己検聴の手法を用いればよい。単に、学生が個々に自分の進度で練習するというだけの理由では、2トラック録音機は必要でない。

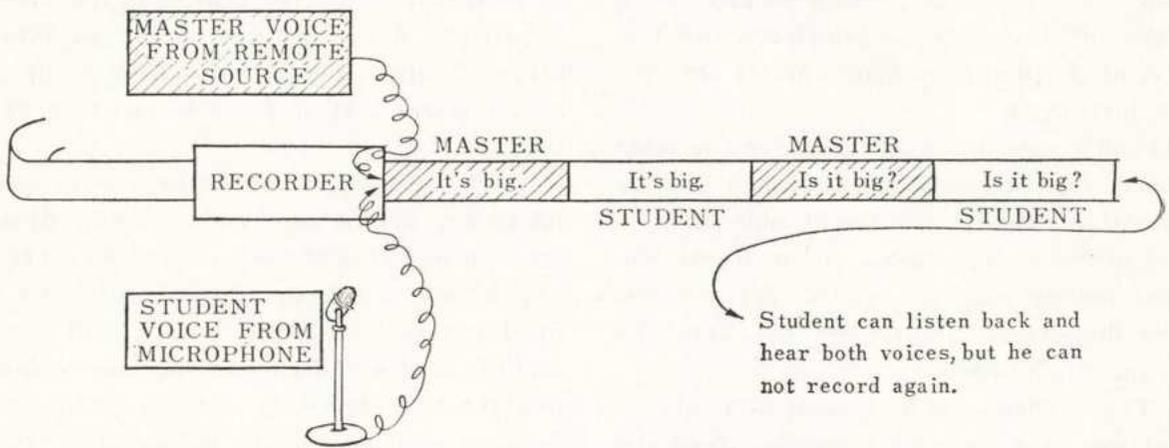
2トラック録音再生機の特長は次の通りである。すなわち学生は教材の声を聴いて自分の反応を録音し、その後教材を聴き返して自分の声だけを何度でも録音し直すことが

The unique feature of dual-track recording-playback equipment is the following: the student can listen and record his response and then listen back *and re-record his own voice any number of times*. With dual-track equipment, a remote master-voice source is not a necessity since the student can record on tape already containing a master voice, then re-record on this same tape without erasing the master voice. If the student is to record his own response, the

difference between single-and dual-track equipment is illustrated in simplified fashion as follows:

Language laboratory equipment—often referred to as the “hardware”—should, of course, only be selected after extensive consideration, by the participating faculty members, of the objectives to be sought in laboratory work and which type of installation will best facilitate achieving those objectives.

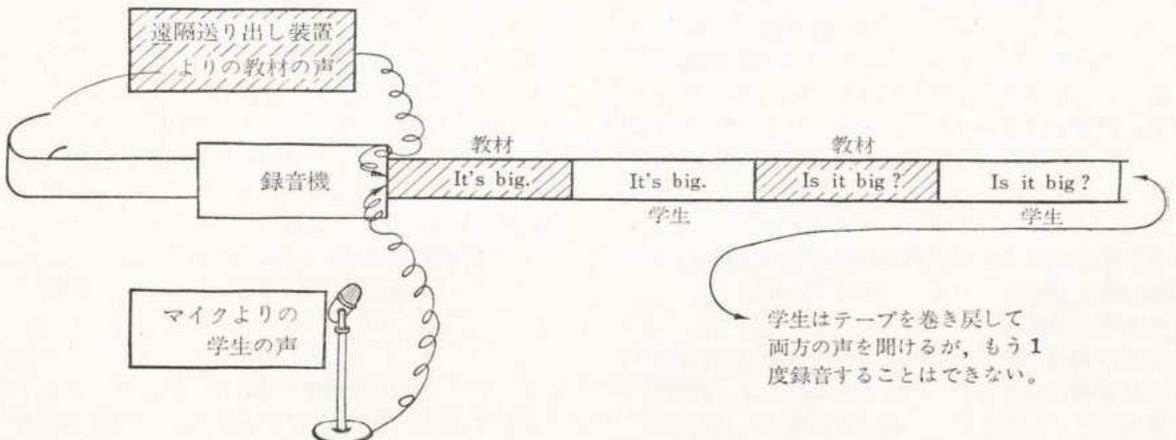
## SINGLE TRACK



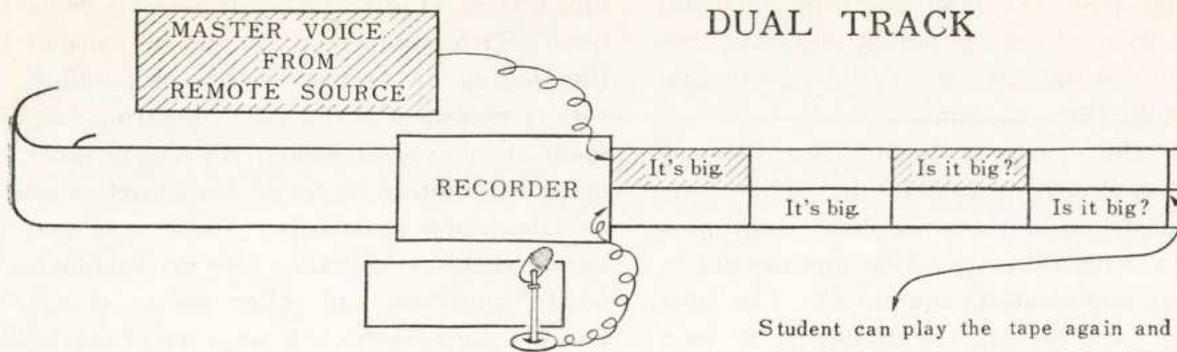
できる。2トラックの装置を使えば、別の所からの教材送り出しは不必要である。学生は、教材が既に入っているテープに自分の声を録音し、その教材の声を消すことなしに

同じテープの上に自分の声を再録音できるからである。学生が自分の反応を録音するとして、1トラックと2トラックの装置の違いを簡単に図解すれば次のようになる。

## 1トラック録音機

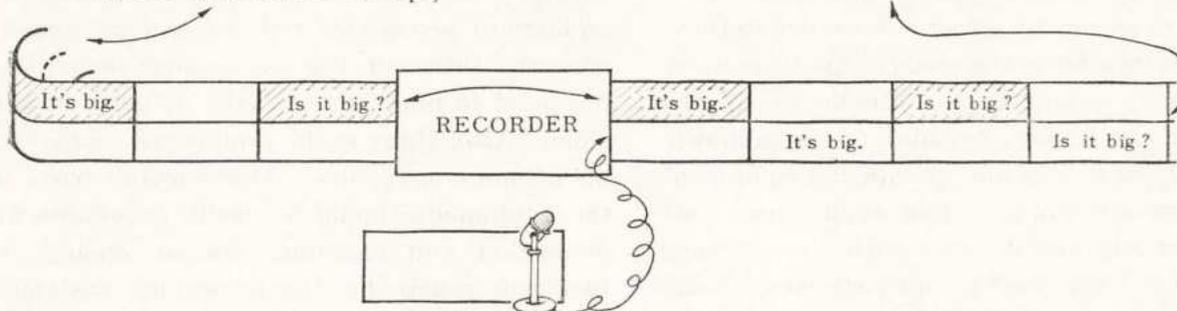


## DUAL TRACK

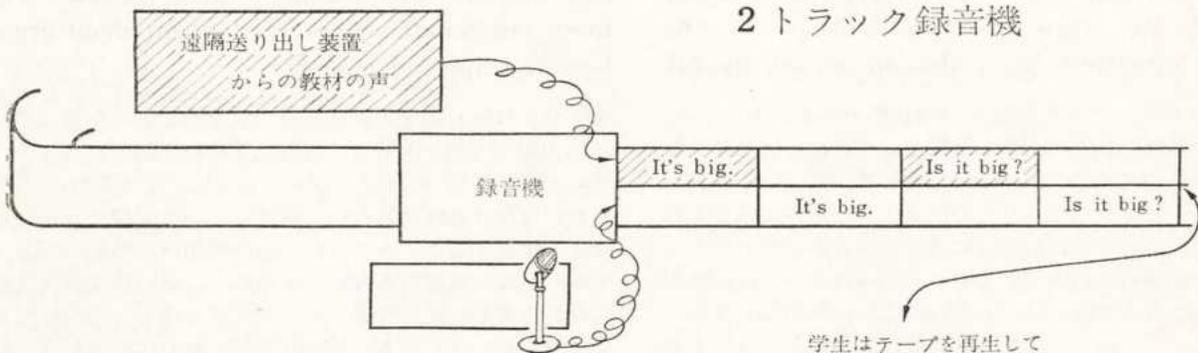


(Master voice ahead on tape)

Student can play the tape again and record his responses again. The master voice will not be erased.

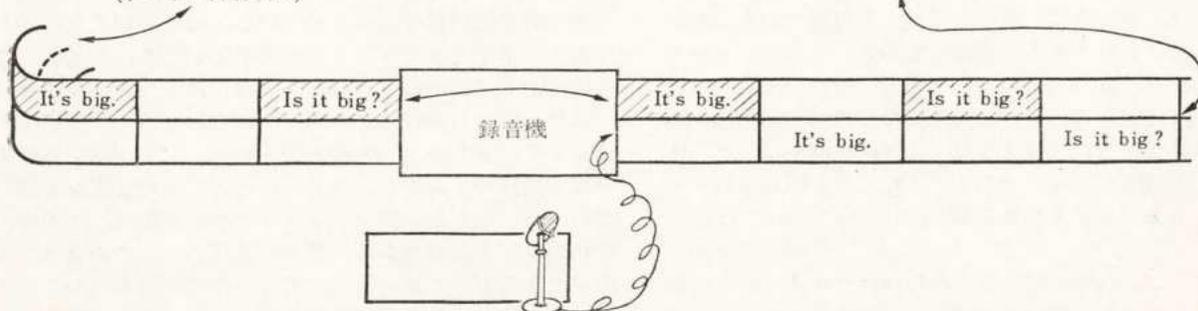


## 2トラック録音機



(教材の声はテープに録音済み)

学生はテープを再生して自分の声を録音し直すことができる。教材の声は消去されない。



This seems obvious enough, yet time and again faculties do purchase equipment and only *then* get around to deciding what they can or cannot do with their equipment.

Today the variety of electronic devices available is almost overwhelming. There are, however, certain features which are vital to a successful laboratory operation and can aid in evaluating and choosing equipment. The most important of these are (1) reliability, (2) ease and amount of maintenance, (3) simplicity of operation, (4) fidelity, and (5) flexibility. It is difficult to assign any particular order to these features since all are probably equally critical.

*Reliability* refers to the functioning of the equipment without trouble or breakdown. Obviously, if it does not operate, the equipment is useless, but worse, it can even cause vast confusion and loss of time within a language program. Tape decks, microphones, headphones must be as durable as possible. Any open wires or cords must be well protected. The machinery must be "student proof" in the sense that it must not break down if the controls are turned too quickly or in the wrong direction or if shaken, struck by fal-

語学ラボラトリーの装置——それは「ハードウェア」(注、原意は金物類、転じて最近では装置と、それにかけるべきプログラムとの対比においても用いられる)としばしば言われるが——は、ラボラトリーの作業によって得ようとする目的のものや、その目的達成にはどの型式の設備が最もよいかを、関係教職員間で広く熟考した後においてのみ選択すべきであることはいふ迄もない。これは充分に分りきったことのものであって、然るもしばしば教職員たちは先ず装置を購入して、それからやっとその装置で何が出来、何が出来ないかを決め歩き廻るありさまである。

今日では、多種多様の電気装置が入手可能で、全く覆いかぶさらんばかりである。しなしながら、ラボラトリー運営を成功させ、且つ装置の評価や選択に役立つ決定的な幾つかの主眼点がある。その最も大切なものは(1)信頼性、(2)保守の容易さとそれに要する量、(3)操作が簡単なこと、(4)忠実度、(5)適応性 などである。これらの主眼点はおそらくすべてが等しく重大であるから、特に順をつけては述べ難い。

信頼性とは、故障を起したりこわれたりせずに、その装置が機能を果たすことを指している。自明のこと乍らもう

ling books, or left "on" for long periods of time. Each component should be capable of functioning for as many years as possible.

It is merely a reality that electronic equipment needs *maintenance*. Provision must be made for this in terms of personnel—student or laboratory assistants. There are weekly items such as cleaning the record-playback heads, capstans, and other parts; demagnetizing record-playback heads; adjusting brake tension; checking pressure pads; tightening screws and control knobs. All laboratory equipment needs this type of *preventive maintenance*. However, the best equipment will be designed to make these tasks as easy as possible. Also, there is the problem of *on-the-spot maintenance* or repairs. The working parts of the equipment should be easily accessible for inspection and cleaning, simple enough to facilitate repair by the laboratory assistant, readily available in ample supply so that replacement does not become a problem. Equipment that requires excessive maintenance can increase costs considerably, require that more personnel be involved, bring about great loss of time and energy.

まく動かなければその装置は役に立たぬどころか更に悪く、語学教育の時間を浪費し、大混乱すらひき起しかねない。テープデッキ<sup>5)</sup>、マイク、ヘッドホンは、できるだけ丈夫なものでなければならぬ。露出している配線やコード類はよく保護すること。こういった機械類は、いわば「耐学生性」がなければならぬ。すなわち、各操作部分は急激に動かしても、反対に動かしても、本を落してぶつけたり揺り動かしたりしても、長時間運転し放しにしても、こわれないことが必要である。各構成部分ではできる限り耐久性をもたすべきである。

電気的装置に保守の欠かせないことは全く以てその通りである。学生とかラボラトリー助手といった、人的面でこの備えをしておかねばならない。録音再生ヘッドやキャップスタン<sup>6)</sup>その他の部品の清掃、録音再生ヘッドの消磁<sup>7)</sup>、ブレイクテンション<sup>8)</sup>の調整、圧着パッド<sup>9)</sup>の点検、各種ネジ類や操作つまみのしめ直し、などといった仕事を毎週して行かねばならない。ラボラトリーの全装置は、この種の予防的保安が必要である。最上の装置とは、このような仕事ができるだけし易いように考えられているものことであろう。突発的保守又は修理という問題もある。装置の消

Another essential characteristic of the equipment is *simplicity*—the ease with which the controls can be handled by the student. Ideally, the student will be required to work as little as possible to use the equipment. If a student has five or six switches or other kinds of controls to operate, he will be distracted from his practice, lose time, and make operational errors more frequently. Complex arrays of controls for students to operate also increase the amount of equipment failure. The matter of tape rewinding can also be included under the category “simplicity.” If a conventional tape reel system is chosen, it should be one which is as foolproof as possible in rewinding characteristics. Machines which do not have a good braking system can cause tapes to break and spill on the desk and floor or to become hopelessly tangled. In examining equipment, this feature should be tested by snapping the rewind switch on and off in every possible way and by purposely using incorrect procedures to see how the equipment responds. Ideally, the rewinding mechanism would be a different one from the forward wind mechanism; this, of course,

耗部品は容易に手が届いて点検とり替えが可能でなければならない。ラボラトリー助手でも簡単に修理ができ、また部品交換が苦にならぬよういつでも充分手もとに備えていなければならない。余計な保守の要る装置は随分と費用も高み、人手も要り、時間と労力の大きな損失をもたらすものである。

装置に関してもう1つ重要な特性は単純性ということである。すなわち、学生が操作をするしやすさである。理想的には、学生が使用する時に出来るだけ少しの操作ですむものがよい。動かすのに5つも6つものスケッチやその他の操作箇所があると、学生は練習に気が散り、時間を無駄にし、操作の誤りをより頻繁に起すことになる。複雑な操作部分がずらりと並んでいて学生がそれを動かすとなると、機械の方の誤動作もふえてくる。テープ巻戻しのことも、この「単純性」の範疇に入れ得る。一般に使われているテープ巻枠型式のものを選ぶのであれば、巻戻し特性のできるだけ間違いのないものにすべきである。ブレーキ機構のしっかりした機械でない、テープが切れて机上や床に流れたり、もつれて手のほどこしょうがなくなったりすることがある。装置を選ぶ時にこれをためすのには、巻戻しの

would increase the price of the equipment. The rewind mechanism should also be reasonably silent. An accurate counting mechanism for rewinding and forward winding is another important feature of laboratory equipment, especially so for dual-track recorders.

Magnetic recording tape is now available in cartridge form with a device to stop the rewind motor once the tape is completely rewound. The cartridge has the great advantage that the student does not have to thread the tape when starting; he merely drops the cartridge into position and is ready to proceed. Also available now is the so called “endless loop” cartridge. The end of the tape in this cartridge is wound back and spliced to the beginning of the tape. This latter type of cartridge has the disadvantage that it cannot be rewound. Both have the disadvantage that they are more expensive and tend to stick or make squealing sounds. At the time of writing, the author is not aware of any company which has developed a satisfactory lubricant or friction eliminator to prevent these two undesirable features. However, if a satisfactory cartridge with conventional

スイッチをバチバチと ON や OFF に、わざとでたらめにいろいろ動かしてみ、その装置がどう反応するかを見ることである。理想的には巻戻し機構は前進・巻取り機構と別になっていることがのぞましい<sup>10)</sup>。もちろんこうなると装置の価格の方も高くなるであろう。また巻戻しにはもちろんあまり音がしてはならない。テープの巻戻しや前進を計るカウンターが正確であることもラボラトリー装置のもう1つの重要点で、これは特に2トラック録音機では然りである。

カートリッジ型式の磁気録音テープでテープが全部巻き戻されると巻き戻しのモーターが止るようになっているのも市販されている。カートリッジ式は始めにテープを溝に通す必要がないので学生には大変便利である。カートリッジをはめ込みさえすれば、それで準備が終る。又、いわゆるエンドレス・ループ式のカートリッジも現在市販されている。このカートリッジ中のテープは、巻終りをテープの先端に戻して接着してある。後者の形式のカートリッジは逆転し得ない点が欠点である。共通の短所として価格が高くなることと、固く巻きついてしまったりキーキーいう音を出し易い点である。筆者は今執筆の時点では、これら

right-left reels is developed, equipment that would utilize this cartridge would seem to be the best choice.

Still in connection with "simplicity," another reality is the fact that some students, somewhat more often female than male, are simply not adapt with mechanical equipment and can even be thrown into a panic by equipment complicated in operation. Obviously, it is not fair to penalize these students in their task of language learning because of mechanical ineptitude.

*Fidelity* is another vital feature of language laboratory equipment. The quality of the sound signal which reaches the student's ears—fidelity—should be as good as possible with reasonable limits. There are two problems in this connection. First, as previously mentioned, there will necessarily be some loss in fidelity through the recording, copying, transmitting process, and further, this loss tends to become greater as the equipment ages, despite good maintenance. Second, there is some difference of opinion regarding the fidelity which is essential, and sufficient factual information is still

2つの欠点を防止するよい潤滑剤を開発したという会社を聞き及んでいない。しかし、従来の左右両リール型式でよいカートリッジが開発されれば、そのカートリッジを使った装置が最もよいように思われる。

「単純性」に関連してもう1つの現実の姿は、学生の中には、男子よりも女子に比較的多いようであるが、機械装置には全然適応せず、操作の複雑な装置には恐慌すら来たす者のいることである。機械に弱いからといってこれらの学生の語学学習を不利にすることは明らかに不公平である。

忠実度は、語学ラボラトリー装置の今1つの重大な要点である。学生の耳に聞える音声信号の質——忠実度——は、無理のない限度で出来る限りよくなければならない。この点に関して問題が2つある。第1は、既述の如く、録音し、コピーし、送り出す過程には、忠実度において幾分の損失が必ず生じるもので、更に又この損失は、どんなに手入れをしても装置の老化にともない増大し勝ちのものである。第2には、どれ程の忠実度を必要とするかについて現在意見が分れており、これに関して未だ充分事実に基づく情報は得られない。Locke (原注5) は次のように言っている。

unavailable on this point. Locke<sup>5</sup> states, "Specifications set up in the *Purchase Guide* of the Council of Chief State School Officers of the NEA, (Ginn, 1959), p. 26, are based on educated guesses of what might be the ideal. I am sure that there is not a single language laboratory in the country which meets the recommended system frequency response of '75 to 9000 cycles per second (cps) within plus or minus two decibels ( $\pm 2$  db).' No one can be sure that we really need such high performance. On the other hand, as the *Guide* points out, belt and magnetic disc recorders do not even meet minimum specifications. These minima have not been established, either, on the basis of research into the effect of frequency response of equipment on language learning, but relevant data from studies in communications and in speech analysis do indicate that there are minima which are substantially above the performance of most of today's laboratories. My guess, for what it is worth, is that a system frequency response of 300 to 6500 cps  $\pm 3$  db is the minimum that will transmit all the vital information for Romance languages; Germanic and other consonantal

「NEA (訳注, National Education Association) の公立学校係官主任会議著、『購入の手引き』(Ginn 出版, 1959年)の26頁に定めてある規格は、教育的に何が理想かの推測に基づくものである。ここに推奨している周波数特性の、『変動巾プラスマイナス2デシベルで<sup>11)</sup>、毎秒75ないし9,000サイクル』に合致する語学ラボラトリーは、米国内に皆無であることは確実である。このように高性能を本当に必要とするかどうかは誰も確言し得ない。一方、『手びき』の指摘する如く、テープや磁気円盤録音機はこの最低規格にすら合致しない。この最低線は、言語学習設備の周波数特性の効果研究の上からも未だ確立されたものでない。しかし、コミュニケーション研究や談話分析の研究による明確な資料によれば、最低基準は今日の大部分のラボラトリーの性質よりも実質的に上にあることが明らかである。私の推測では、まずまずの所、総合周波数特性300ないし6,500サイクル/秒、 $\pm 3$ デシベルというところがラテン系言語の重要なすべての情報を送る最低線である。ゲルマン系その他の子音的言語では8,000サイクル/秒 $\pm 3$ デシベルまで必要とするであろう。」

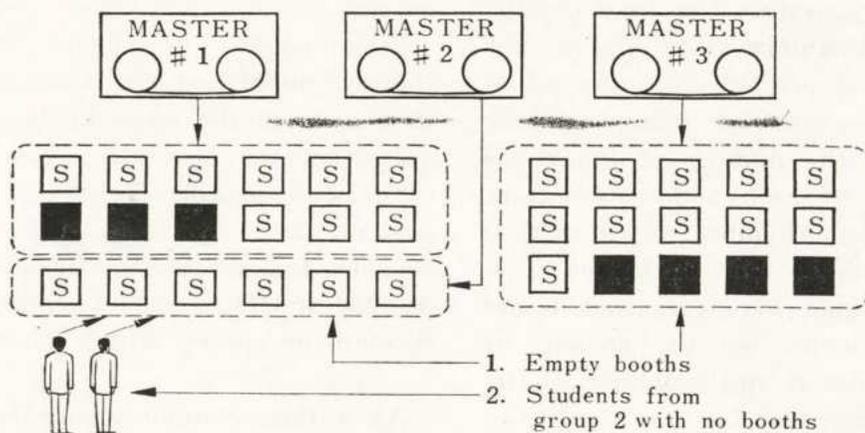
適応性 ということも1つの重要な特性として、語学ラ

language may well need to go to 8000 cps  $\pm$  3db.

*Flexibility*, as a vital characteristic, essentially concerns making the language laboratory as useful as possible for as many students as possible. First, the laboratory equipment should provide the possibility for any master program to be played into any student booth. The larger the laboratory and the greater the number of students, the more vital this becomes. The writer is familiar with one U. S. university laboratory equipped with over one hundred student booths but has an average

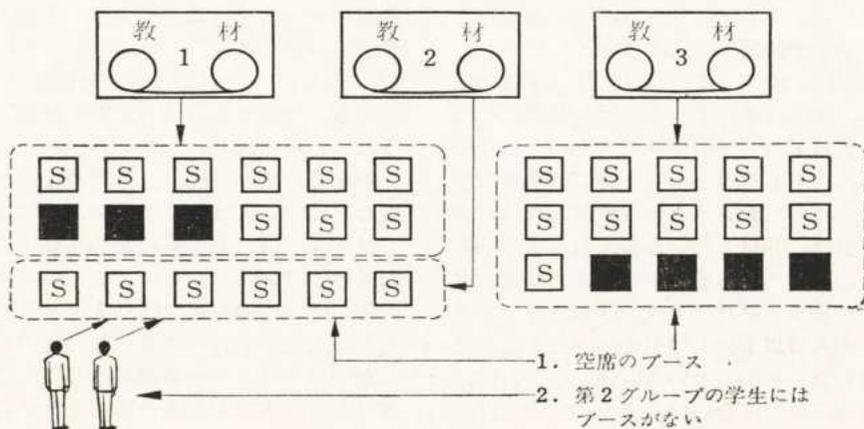
maximum efficiency of less than 70%. To reduce initial costs to the university, provisions were made to play master programs only into whole rows of five or six and only into blocks of 15 or 18 booths. This, of course, brought about grave scheduling problems. While there were no booths for some students, there were often empty booths! A simplified diagram of what can happen in this kind of arrangement follows:

Providing the flexibility to direct any master program into any booth naturally involves



ボラトリーを可及的多くの学生に最大限役立たせしめることに大いに関係がある。まず、ラボラトリー装置では教卓の側の任意の教材プログラムを任意の学生用ブースに流してやれるようにしておくべきである。ラボラトリーが大きければ大きい程、そして学生数が多ければ多い程このことは重要となる。学生用ブースが100以上もありながら実際には平均その7割ほど活用できないというアメリカの某大

学のラボラトリーを筆者はよく知っている。当初設置の時の費用を節減しようとしてその大学は、各列5~6席1括で、15~18名のブロックに分けてしか教材プログラムを送れないようにこしらえた。もちろんこれでは時間割編成に甚だ困った問題が生じた。ブースを使えない学生が何人かいるのに一方ではいつも空席が生じているのである! こういった配列ではどんなことになるか、次に簡単に図示する。



more expense and makes the master control console or room more complicated but will cause fewer problems in scheduling and make a smaller number of booth service a larger student load. This is one feature of equipment where schools would be wise, indeed, not to attempt to cut costs.

Flexibility is also provided by making the laboratory suitable for individual as well as various kinds of group practice. As will be discussed later, students do not necessarily have to use pre-recorded master tapes to work under the "library system" or individually. However, if the laboratory is to provide for both major types of practice, the number of master transmitting machines should roughly be more than the number of languages taught and levels of each and/or one more than the maximum number of individual students to be handled each working on different programs. Again this involves additional expense in equipment, but the amount of flexibility it provides is, in the opinion of the author, well worth the cost.

Provision for more than one type of monitoring also gives considerable additional flexibility

任意の教材プログラムを任意のブースに流す適応性をもたせるには当然費用が嵩み、マスターコントロール・コンソール（訳注、指導操作卓）や部屋のつくりが複雑化するが、時間割編成上の問題が少なくなり、比較的少ない数のブースで、より多くの学生に使わせることができる。このことは装置の1つの特色であり、よく考えて、経費を惜しんではならない点である。ラボラトリーは、単に各種のグループ練習のみならず個別練習にも適するように作っておけば、これもまた適応性が出てくる。後（訳注、本講の最終回）にもふれるが、学生は必ずしも「図書館型式」で、つまり各個に、録音教材テープで勉強すべしというわけではない。しかしながら、もしラボラトリーをこの主要練習型式の両方に向くようにしておこうというのであれば、教材送り出し用の機械数は、開講している各語科の学年別の数より多い目にしておくべきである。かつ、またはそれとも、学生に同時に個々別々のプログラムで学習させようとする場合の学生の最大人数以上にしておくべきである。この場にも装置に余分の金がかかるという問題をはらむが、それにより得られる適応性の度合いは、金をかけるだけの価値が充分にあるものと筆者は考える。

and involves little additional cost. The three usual monitoring systems are (1) console monitor, where the instructor can listen to any booth from the console position, (2) row monitor, where the instructor can listen to any booth in a given row by plugging into a jack at the end of the row, (3) individual monitor, where the instructor plugs into an additional jack right at the individual student booth. Substantial arguments can be offered for any one of the three systems, but there is, as yet, little evidence to prove one better than the other.

Finally, under the heading of "flexibility," the equipment and the way in which it is installed and the physical location should be such that the laboratory can be expanded easily and inexpensively either in student position or in console facilities. Failure to consider this feature in advance can result in doubled or tripled costs when and if expansion becomes necessary, which it usually does.

As a final comment concerning the vital features of language laboratory equipment, attention should once again be called to the

教師が何種類かの方法で検聴できようしておくことも適応性が増し、しかもこれにはそれ程余分な経費はかからない。ふつう行なわれる検聴の方法は、(1)コンソール検聴、これは教師がコンソールの所においてどのブースの学習状況でも聴けるもの、(2)各列検聴、これは、教師がある列の最端位置にあるジャックにヤホンを差し込んで、その列の任意のブースを検聴するもの、(3)個別検聴、これは教師が各学生のブースの所で予備ジャックに差し込むもの、などである。この3つの方法のどれについても議論は色々であろうが、今のところそのどちらがよいかについては、はっきりとは立証されていない。

適応性の項の最後に、装置やそのすえつけ方、部屋の位置などについては、ラボラトリーでは学生用ブースでもコンソール装置でも容易にかつ安価に拡張しようと考えておくべきである。前もってこの点考えておかないと、もし拡張の必要に迫られた時に2倍も3倍も経費が嵩むことになる。大い拡張が必要になってくるものである。

語学ラボラトリー装置の重要な着眼点について最後の論評として、事実上考うるありとあらゆる型の電気装置が入手可能になりつつあるという事実に対して、もう一度注

fact that electronic devices of virtually every type imaginable are becoming available. Without question, schools and faculties should try to keep abreast of these new developments and examine new equipment whenever possible. In so doing, however, there is the danger of becoming fascinated by what the author calls "electronic wizardry." Wireless speaker to headset broadcast units, recorders designed for 32-track belts, recorders that provide immediate reverse-playback of each master and student utterance are only a few of the phenomenal laboratory devices the author has examined recently. Many have had very attractive features, but the majority, in the author's opinion, have failed to measure up in

one or more of the vital characteristics discussed above. In fact, this has been the case so frequently that one might be led to suspect that a rule of the thumb can be made: the more complicated or unusual equipment is, the more apt it is *not* to measure up in those characteristics considered most important in language laboratory equipment.

(Continued)

意を促しておきたい。学校当事者や教職員は、これらの新しい発展に遅れずについて行き、条件が許す時には新装置を試してみようと心掛けるべきであることには異論はない。しかしながらその場合、筆者のいう「電気魔法」にかかる危険がある。頭載型受信機への無線送話装置、1本のテープで32トラック用の録音機、教材と学生の発声の1区切りごとにただちに巻戻し再生してくれる録音機などは、最近筆者も手にしてみたすばらしいラボラトリー装置のごく一例である。これら多くのものにはまことに魅力的な点がある。しかし筆者の考えでは、その大部分のものは前述のラボラトリーに不可欠の特性のまたはそれ以上になていない。事実こういうことがあまりにもしばしば起って来ているので、むしろ大ざっぱであるが実際的な方法があつてよいのではないかと思われ出すのである。複雑で珍らしい設備であればあるほど、語学ラボラトリーに最も重要と考えられる特性を欠きがちなものである。(次号に続く)

4. Morton, F. Rand, *The Language Laboratory as a Teaching Machine*, Ann Arbor, Michigan, August-October, 1959, pp. 3-4.
5. Locke, William N., Chairman, Dept. of Modern Languages; Massachusetts Institute of Technology "Equipment for the Language Laboratory," paper presented at the Laboratory Conference, Indiana University, January 22-23, 1960.

語感から言っても headset とよびたい。米国ではこれら用語の使い分けはあまり意識されてないようである。

- 2) Audio-active を強いて訳せば「自話同時可聴型」となるが、既にかなり熟した LL 用語としてこのままカナ書きして用いるのが好ましいと考える。注1に提案する意味での(マイク付き) headset 必ずしも Audio-active でないことに注意されたい。
- 3) 訳者の体験からして、「トラック」という用語と、「チャンネル」という用語を使い分けておくことが学生の操作指導や保守に便利である。「チャンネル」は教材送り出し用の回線の指示に用いるとよい。2チャンネルの LL という場合、その LL は学生ブースへの教材送り出し回線が2本あることになる。「トラック」は1本の録音テープ(巾万国共通で1/4インチ)中の録音帯の指示に用いるとよい。上のトラック、下のトラックなど。
- 4) LL とは常にイヤホンで聞くものとは限らない。ピアノの練習小室のように、完全遮音の小室をいくつか用意すれば、その中ではスピーカーで教材の声を聞くこともありうる。ここでは、イヤホンの有無にかかわらず、またそのイヤホンが Audio-active なものであるなしにかかわらず、の意味と解される。
- 5) テープレコーダーの駆動機構(メカニズム)。普通のテープレコーダーは、この他に電氣的機構、スピーカー、箱などが一体となったものである。
- 6) キャップスタンは録音機のモーターの動力が伝わり、ここでテープを定速度で引張る部分。不手ぎわにつきはぎした録音テープを使うと特に、この部分や録音ヘッドにごみが付着固定して音質を悪くする。四塩化炭素液を、筆管の先に巻いた綿にふくませて拭くとすぐ落ちる。簡易な作業である。
- 7) 録音再生ヘッドそのものには本来少しでも磁気があつてはならない。使用中各種の理由で、ヘッドが磁気を帯び出して音が悪くなることがあるが、消磁器の先端で軽くなげると、これがとれる。簡易な作業であるが、数が多いと労力が大きい。
- 8) 録音機は走行中のテープに、反走行方向に張力をかけて、テープ面がヘッドに圧着し、また一定速度で進むように本来作られている。注油その他の関係でこの張力が当初のものと変わることがあり、この調整はやや専門的技術を要する。
- 9) テープが走行中録音ヘッドによく圧着するように、ヘッドの部分でテープを押えるような構造になっている録音機が比較的多い。この押えの接触面の、フェルトの小片が磨耗したりとれたりすることがあり、その場合、同じフェルトの小片を貼り替える必要がある。
- 10) 普通の2〜4万円クラスの録音機にはモーターは1こで、機構的に各種のすべり車を切りかえてテープの前進巻戻しなどをさせている。高級品では定速前進・早送り・巻戻しにそれぞれの専用モーターを備え、機構的に安定している。
- 11) 録音機の周波数特性として、カタログを見ると、単に 70~15,000 c/s としてあることがある。これは、70 サイクルから 15,000 サイクルまでの音が、とにかく出るというだけであつて、出力の変動巾が大きければ無意味である。デシベルは音響学上で用いる単位。

#### 〔訳 注〕

- 1) receiver, earphone, headphone, headset は訳出し分け難い。receiver は受話器全般。earphone はその中で耳にあてたまま(または押し込んだまま)にしておける工夫のしたものであるもの。headphone は更にその中で頭の上に支持帯をもつものであれば、片耳用でも両耳用でもよいことになる。headset となると両耳用の receiver のついた頭かけ式のものみに規制される。小型マイクを同時に組みこんで一式にしたものは、

# 日英両語 音声の比較

(3)

国 広 哲 弥

## IV. 母 音 (承前)

(4)  $\left. \begin{array}{l} /o/ [o] \\ /ɔ/ [ɔ] [ɒ] \end{array} \right\}$  オ  $[o^*]$

前回触れたようにアメリカ人の中には /o/ と /ɔ/ 例えば *story* /stórij/ と *sorry* /sórij/ を区別する人があるから、この事実は一応心得ておかねばならない。そうでないと教科書などでは同じ [ɔ] が用いてあるこれらの語の音色の差にとまどうことになる。しかし我々の目標である 'General American' ではこの種の区別はないから、我々としては専ら *coat* と *caught* の区別に意を用いよ。

*Coat* [kəʊt] [kɔt] と *caught* [kɔt] [kɒt] の母音の部分音を音韻的に /ow/ : /o/ とするか /ɔw/ : /ɔ/ とするか、あるいは /o/ : /ɔ/ とするかは意見の分かれる所であるが、両者が区別されていることには変りはない。我々は [ou] が二重母音であることに注意すると同時に、その [o-] が [ɔ] よりも狭い点に特に留意しなければならない。両方をオ  $[o^*]$  に引きつけてしまう傾向があるからである。この引きつけ作用は聴覚的にも調音的にも見られる。前回に示した母音四辺形に見られるようにオは /o/ よりも /ɔ/ からの距りが大きいから、発音に際しては /ɔ/ で思い切り口を開くようにしなければならない。二重母音の [ou] が「負う」/o'u/ のように二音節にならないように注意することは [eɪ] の場合と同様である。/ɔj/ [ɔj] [ɔɪ] も同様に「甥」/o'i/ にならないようにする。

(5)  $\left. \begin{array}{l} /u/ [u] \\ /uw/ [u] [u:] \end{array} \right\}$  ウ  $[u]$   $\left\{ \begin{array}{l} [u] \\ [u:] \end{array} \right.$

ここではまず /u/ と /uw/ が音色の点でウ  $[u]$  に引きつけられ、更に英語にあった音色の差が日本語で長さの差に置き換えられる傾向がある。ウの発音においては唇の円めが殆どない点の特徴であることは前回触れたが、英語では十分に唇を円めねばならない。/u/ は舌の位置がウよりも低い点に特に注意を要する。/uw/ においては舌の位置がずっと奥で高く、かつ二重母音的傾向があることに注意しなければならない。

例外的な現象として、イギリスでもアメリカでも *good* は唇の円めが取れて [gʏ(:)d] [gyd] のように発音される傾向がある<sup>1)</sup>。

以上で触れなかった二重母音として [ə] と結合するものがある。

ir/ *year* [fɪə]  
er/ *fare* [fɛə]

/ar/ *far* [fɑə]

/ɔr/ *four* [fɔə]

/ur/ *poor* [pʊə]

/ɔr/ *fur* [fɜ:]

これらは調音的には [-ə] がアになるという干渉が生じる。

二重母音全般に関して、主母音を長く、副母音を短く軽く発音するよう注意する。しかしこの点を不注意に強調すると、長くし過ぎたり、語末・有声子音の前・無声子音の前を問わず一律に長くしてしまったりする。これは母音全体について見られる現象であるが、長さは語末が一番長く、有声摩擦音・有声破裂音・無声摩擦音・無声破裂音の順でその前では段々短くなる。

### 母音の無声化

次に母音全体に関係する現象として日本語における母音の無声化がある。三省堂の『日本語アクセント辞典』では無声化母音が表記されているが、いま法的に述べてみるならば次のようになる<sup>2)</sup>。

- 1) 無声化を起すのは狭母音 /i/ と /u/ である<sup>3)</sup>。
- 2) その音声的環境は無声子音と無声子音又は呼吸段落には含まれた場合である。
- 3) 最初の高アクセントが来ない場合：例 [-\_φ\_ɰ\_ kw\_ -\_j\_ ki\_]「複式」、[-\_t\_ʃ\_ j\_ ki\_]「知識」。この例では最初の高アクセントは [kw] と [tʃ] に来ている。
- 4) (上例のように) 1) と 2) の条件を満たす母音が2つ以上連続した場合は無声・有声は交互に現われる。

上に述べた無声化の現象は東京方言及びそれと類似の方言に見られるもので、西日本では弱くなり、東北・出雲地方では一層顕著になる。出雲地方では有声子音・母音の前でも無声化を起し、烈しい摩擦音を生ずる。

このような傾向の干渉で次のような語ではイタリックの部分が無声化する傾向がある。

*apetite, beautiful, bicycle, British, capital, superior, etc.*

### 日本方言音

最近の若い世代の発音は、その親の世代が出雲地方のように共通語から著しくずれた発音を保存している場合でも意外に共通語に近いものになっている。[i] のような著しくずれた音は本人達も意識しているのでかえって干渉の元にはなりにくいが、意識されないような微妙なずれが干渉

1) Cf. Ida C. Ward, *The Phonetics of English*, Heffer, § 167; H. C. Wyld, *The Growth of English*, John Murray, p. 80; Gimson, *An Introduction to the Pronunciation of English*, p. 112.

2) Cf. Reiko ISHIDA, "Voiceless Vowels in Japanese", *Studies in Descriptive and Applied Linguistics*, Vol. 1, ICU.

3) この狭母音は音声的に特徴ある行動を示すようである。出雲方言のアクセントの特徴の一つとして、第2音節が /i/ /u/ の時は高アクセントが来ないということがある：[-\_sɪ\_ mo\_ ja\_ ke\_] に対して [-\_ka\_ ki\_ ka\_ ta\_], [-\_jo\_ kuu\_ ba\_ ri\_] となる。エスキモー語では /ptkq/ は後に [i] [u] が来ると有気音化されるという。Cf. A. A. Hill, *Introduction to Linguistic Structures*, p. 421.

の元になりうるので注意が必要である。例えばズーズー弁地域及び関東地方なら埼玉県あたりまで共通語よりもわずかに狭い [e] がある。これで英語の /e/ を発音しようとすると /i/ に受け取られる恐れが充分にある。出雲出身のある中年の英語の先生が英語の /e/ と /i/ を共に [e] /e/ で発音され、if と F が同音になるのを観察したことがある。

方言音も逆に有利に利用できる場合があるであろう。出雲の [e] は英語の /i/ とのみ結びつけられれば東京方言などの /i/ よりもずっと近い音である。東北地方の一部では「蠅」[he:] と「塀」[he:] が区別されているというが、fare と fate の区別に利用できそうである。更に新潟県の一部・山梨県奈良田では「塔」[tə:] と「十」[tə:] が区別されているという。アイが [æ:] のようになる方言は全国各地に散在している。生徒自身がこれらの方言音を保存していなくても、その身边に親しく聞かれるこれらの音を説明に利用することは魅力的でかつ効果的であろう。

### V. 子 音

子音については(1)まず音韻としての食い違いから出発してその異音に及び、(2)音韻としては問題はないが、音声的に問題のあるものに触れ、(3)最後に音声的に見ても問題はないが分布の点で干渉が起りうるものを見て行くことにする。説明の便宜上ある程度の混同はまぬがれないであろう。

#### (1) 音韻の面における比較

両語の子音音素の体系を比較してみると下の図のようになる。実線で囲んだものは英語にはあるが日本語に欠けているもの、点線で囲んだものは逆に日本語にあって英語にないものを示す。

英 語	日 本 語 (東京方言)
pb td [tʃ] kg fv θð sz [ʒz] m n ŋ l r j w h'	pb td c □ kg Q □ □ sz □ m n ŋ N R □ r j w h' J
/č/=[tʃ], /j/=[dʒ] /š/=[ʃ], /z/=[ʒ] /r/=[ɹ] [ø] /'=[有声喉頭音素]	/ci/=[tʃi], /cu/=[tsu]

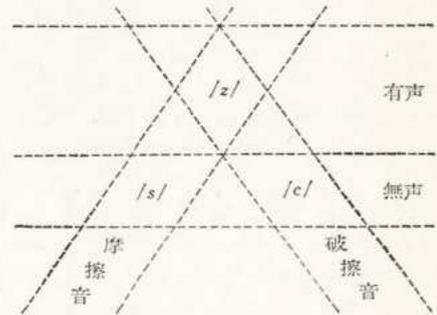
この図を見て直ちに予測されることは、我々日本人にとっては実線で囲まれた音素に困難があり、アメリカ人の方では点線で囲まれたものに困難があるであろうということである。この吟味にはいる前に、一見大した問題はなさそうに思える E(english)/s, z/ と J(japanese)/c, s, z/ の比較を説明の便宜上行なってみよう。

#### J/c, s, z/ と E/s, z/

東京方言などの音韻体系の中では /c, s, z/ に関連のあるモーラ音は次のようになっている。

da ダ ta タ		de デ te テ	do ド to ト			語頭子音 ……破裂音		
	ci チ	cu ツ		cya チャ	cyu チュ	cyo……破擦音		
	za ザ	zi ジ	zu ズ	ze ゼ	zo ゾ	zya ジャ	zyu ジュ	zyo……破擦音 ……摩擦音
	sa サ	si シ	su ス	se セ	so ソ	sya シャ	syu シュ	syo……摩擦音

これからも察せられるように /c, s, z/ は一種の三角関係にある。



すなわち /z/ は /s/ の有声音であると同時に /c/ の有声音でもある。この故に /s/ は常に摩擦音、/c/ は常に破擦音であるのに対して /z/ はその中間的性質を持ち、語頭で破擦音、語中で摩擦音なのだと言明することができる。

	語頭	語中
/za/	[dza]	[za]
/zi/	[dʒi]	[ʒi]
/zu/	[dzɯ]	[zɯ]
/ze/	[dze]	[ze]
/zo/	[dzo]	[zo]
/zja/	[dʒa]	[ʒa]
/zju/	[dʒɯ]	[ʒɯ]
/zjo/	[dʒo]	[ʒo]

ただしこれも方言により個人により程度に差がある。

一方英語の方では /s/ は /z/ とのみ有聲・無聲の関係にある。従って E/z/ は決して破擦音的異音を持つことなく、常に純粋な摩擦音である。この故に我々日本人は英語の語頭の [z-] の発音に大きな困難を感じないのである。この発音に際しては舌先を上あごにそっと近づけるようにするとよい。

アメリカ人の立場になって考えると、我々の困難点は逆に彼らの困難点でもある。まず J/z-/ を文字の干渉もあずかって [z-] で発音することが予測される。次に J/c/ の発音困難がある。すなわち J/ci/ [tʃi] を舌の位置を後にさげて E/çi/[tʃi] で発音する傾向及び J/cu/[tsu] の発音困難である。J [ts-] に殆ど等しい音として cats [kæts] などの音節末の [-ts] はあるけれども、日本語のように音節の頭に現われることはないという分布上の相違がその原因である。英米人はドイツ語の 'z-/ts-/ でも同じ困難に遭遇しているわけである。(島根大学助教授・ELEC 研究員)

# ELEC 会館開館式特集

さる2月23日(火)午前11時より ELEC 会館の開館式が行なわれた。財界、政界、教育界の指導者約300名が列席して盛会であった。なお、午後3時から、同会館の披露が行なわれ、約200名の方が訪れた。

## 竹内俊一氏

財団法人英語教育協議会理事長

あいさつ

本日、愛知文部大臣閣下、ライシャワー米国外務閣下、ロックフェラー3世氏、その他内外各界から多数の来賓を迎えまして、ここに ELEC 会館の開館式を挙行いたしますことは私どもの最も光栄とし、かつ深く喜びとするところであります。

現下の世界の情勢は、政治、経済、文化などあらゆる面で国際間の提携、交流がいよいよ緊密の度を加え、またその必要度がとみに高まって参りました。そして国際交流の主要な手段である外国語、なかんずく広域語としての英語の教育の使命と責任はきわめて重大であります。この事実にかんがみまして今から9年前、すなわち昭和31年にわが国の学界、財界その他各界の有志によって、日本英語教育研究委員会が設立されまして、わが国における英語教育の進歩と改善のために貴重な研究と実験を重ねて参ったのであります。この委員会の業績を基盤といたしまして、その活動を一層強力に推進するために昭和38年2月、同委員会にかかわるものとして当財団法人英語教育協議会が文部大臣の許可により設立されたのであります。爾來、当協議会は英語教育に関する研究、英語教員に対する専門的な講習会の開催、一般成人を対象とする常設英語研修の実施、英語教育に関する資料の作成、英語教育の研究に対する援助、助言などの活動を積極的に進めて参りました。

当協議会のこうした活動の本拠となるべき会館の建設は、日本英語教育研究委員会時代からの宿願でございましたが、当協議会の使命と事業に対する国の内外各方面の深いご理解とご支援によりましてこのほどごらんを通り鉄骨鉄筋コ

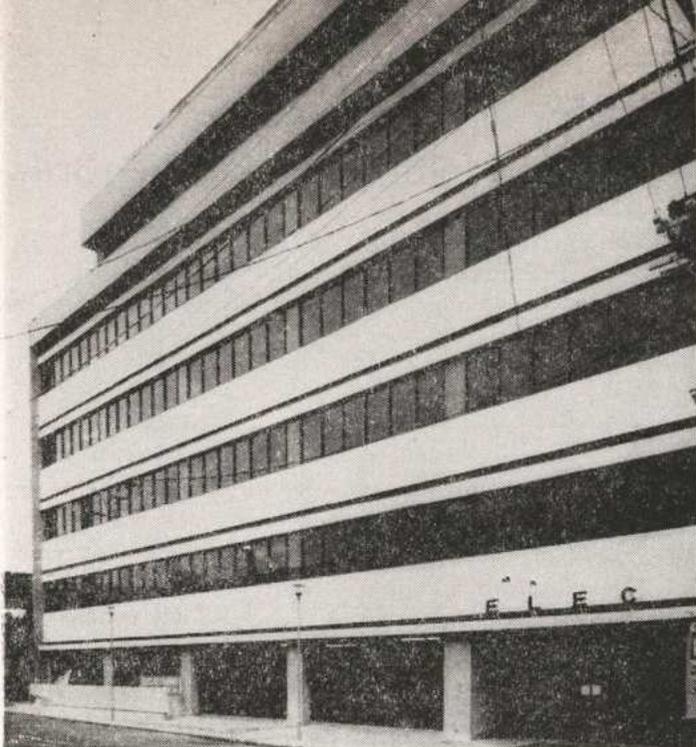
祝辞

竹内俊一氏  
愛知揆一氏  
Mr. John D. Rockefeller  
3rd

市河三喜氏  
植村甲午郎氏  
Mr. E. W. F. Tomlin  
The Hon. Edwin O.  
Reischauer

ンクリート造り、地下1階地上7階の威容を誇る近代的建築 ELEC 会館が竣工いたしました。これを本拠として今後ますますわが国の英語教育の進展に大きく寄与できる運びと相なりましたことはまことに喜びに耐えないところでございます。ここに、皆さまから与えられました有形無形の絶大なご援助に対しまして心から厚くお礼を申し上げます。

この会館につきまして少し申し上げさせていただきますと、敷地が203坪5勺でございますが、これは金田東江氏から無償の地上権設定の好意あるお申出がありまして、それを受諾したものでございます。同氏の当協議会の使命に対するご理解とご厚情に対しここに深厚な感謝の意を表すものでございます。建設費の総額は2億4,900万円であります。そのうち1億1,900万円は、かねてから国際間の理解増進のために尽瘁せられ、そして当協議会の事業に絶大な支援を与えられてこられました John D. Rockefeller 3rd 氏の創設にかかる米国の財団 The Agricultural Development Council からの援助金であります。この式をロックフェラー氏ご夫妻のご出席のもとに挙行できますことは私どもの最も喜びとするところであります。同氏のご厚情とご支援に対し、ここに厚くお礼を申し上げる次第でございます。残りの1億3,000万円は国内で調達する計画を立てまして、そのため当協議会に資金委員会を設けまして、委員長に植村甲午郎理事を、委員に酒井杏之助理事と浅尾新甫理事をわずらわし、多大のご尽力をかたじけのないういたしております。そしてそのうち7,000万円は財界の募金により、6,000万円は銀行の借入れによることにいたしました。募金につきましては財界各社の格別のご懇情とご支援をかたじけのないういたしております私どもの感謝に耐えないところでございます。たここに厚くお礼を申し上げます。建築の設計並びに工事は清水建設株式会社にお願いたしました。同会社は、当協議会の目的と使命をよくご理解下さいましてご協力を賜わり、着工から1年という短い期間で、この完備した英語研修及び研究の殿堂を完成いたしました。その絶大なご努力とご好意に対して深く



開館式を迎えた ELEC 会館



(上) ELEC 会館講堂での竹内  
俊一氏 (ELEC 理事長) の挨拶  
(右) 展示会場



Mr. J. D. Rockefeller 3rd



市河三喜氏 (ELEC 理事)



植村甲午郎氏 (ELEC 理事)



The Hon. E. O. Reischauer

感謝するものでございます。

ELECが担っております使命はまことに重大であります。私どもはこの新築なった会館を活動の拠点といたしまして、今後ますます日本の英語教育の進展のために努力し、及ばずながら国際理解の増進と文化の交流に寄与するところあらんことを期している次第でございます。何とぞ今後ともよろしくご指導、ご支援を賜りますよう心からお願い申し上げます。

なおまた、官庁、銀行、会社、団体等におかれましてはますます多数の研修生をお送り下さいまして、せっかくでき上がりましたこの施設を十分に利用することができるようにそれによって私どもの使命がよりよく達成することができますようにご協力賜りますようこの機会にお願い申し上げます。以上をもって私のごあいさつといたします。

文部大臣 愛知揆一氏

(代読) 文部事務次官 小林行雄氏

### 祝 辞

このたび、財団法人英語教育協議会の会館が新築落成し、本日ここにその開館式が挙行されるにあたり一言お祝いの言葉を申し上げます。

現今における国際間の交流は、政治、経済、文化などあらゆる方面において目ざましいものがあり、外国語の習得はますますその必要性を増大しております。特に国際語の性格をもつ英語は、わが国が国際間の理解と友好に寄与するためには欠くことのできないものであり、英語教育の振興は今日最も緊要な課題であります。

このような情勢下において貴会が英語教育の使命と責任を認識し、その普及発展のために多大の尽力をされていることに対しまして深く敬意を表する次第であります。このたび貴会の活動の本拠たるにふさわしい施設としてELEC会館がめでたく開館の運びとなりましたことはまことにご同慶に耐えないところであります。今後、東京の中心部に建設されたこの会館から、未来の英語教育を担う人材が続々と送り出され、それとともに貴会の事業が飛躍的な発展を遂げるであろうことを信じて疑いません。本会館の開館を契機として、これまで貴会が果たしてこられた研究と実践の成果の上に立って、今後ともなお一層諸事業を推進され、わが国の英語教育の進展のためにご協力下さるようお願いして本日の開館式の祝辞といたします。

Mr. John D. Rockefeller 3rd

President, Japan Society (New York)

### Speech

I am pleased indeed to be able to be with you on this important occasion. As we inaugurate this new headquarters building, our hearts are warmed by a sense of shared accomplishment. An important facility has been brought into being that can contribute towards a major advance in language study in Japan and thus in turn to the well-being of the Japanese people.

The English Language Education Council as it stands today is the result of the imaginative and dedicated effort of a small group of Japanese leaders who, since 1956, have given unstintingly of their time and energy. This building represents the culmination of their efforts to provide adequate facilities for improved methods of teaching English in Japan.

Now the Council has a firm foundation on which to build. Much has been accomplished—and in less than a decade. But there is no question that a major undertaking still lies ahead. Neither is there any question that the objectives of the Council can be achieved if it has the continuing and active support of the business community, the academic world, and the Ministry of Education. Our confidence is unquestioned because in the work of the Council there is so much at stake, so much to be gained, for Japan and her people.

Improved language training—as a key to better communication—is of particular importance to Japan whose future is vitally and inevitably linked with other nations. Dependent upon others for both raw materials and markets, it is essential that Japan be fully competitive in the marketplaces of the world. The resultant economic benefits of a greater ability to communicate will help Japan satisfy the material needs of her people.

Better communication can also lead towards a fuller and richer life, towards the attainment of rewarding intellectual, spiritual and esthetic values. Just as barriers of language limit learning, so do they inhibit both the flow and the appreciation of the culture of other countries. The satisfactions one can draw from the culture of his own country can so often be aug-

mented by a greater exposure to and appreciation of the literature, the philosophy, the art of another.

And finally, it must be recognized that the task of creating a climate of understanding between nations also depends heavily upon communication. In our rapidly shrinking world the need for greater understanding increases even as the distances diminish. For understanding is an essential ingredient of all truly meaningful relationships whether they be political, economic or cultural.

Today we should look beyond the teaching and the learning of the English language. We should see the work of the Council—ELEC—as a means of fostering international trade, of contributing toward richer, more rewarding lives for all and of creating better understanding between our peoples. Recognizing language as a key to these broader objectives, let us dedicate this building to the attainment of that end.

## 市河三喜氏

東京大学名誉教授

### 祝 辞

英語は申すまでもなく国際関係において意志伝達の道具として、世界のどこでも通用する言葉であります。ELECが創立以来、この国際的に大きな役割を持つ英語を、小学生から大学生まで、またすでに現職にある先生方、また実業界その他いろいろな方面に携わっておる人々を相手に、有効適切な教授法をもって、役に立つ英語の普及に努力いたしまして着々成績を上げておることは感謝に耐えないところであります。

今度、このようなりっぱな建物ができまして、小人数の生徒を教える教室がたくさん設けられ、Oral approachを十分に使いこなすことも可能になり、さらに、Language Laboratoryも設備され利用されております。この場所は昔から江戸の真中といわれました神田地区にありまして、それが日本における英語教育の中心地となったことはまことに意味深く、そこにこのようなりっぱな建物ができ上がったことに対しましては、それを可能ならしめたロックフェラー3世氏を始め、財界の方々のご尽力に対して、われわれ英語教育に携わる者は満腔の感謝を捧げなければならぬのであります。この上は、われわれは国際語としての英語ということを忘れないで、国際性を身につけて、ことにアジアの後進国の人々に対する場合、誇らず高ぶらず、

英語を通じて同等の立場で交際していくことが必要であると思います。一言、自分の近ごろ感じましたことをつけ加えまして、簡単であります但祝辞の言葉にいたします。

## 植村甲午郎氏

経済団体連合会副会長

### 祝 辞

本日ここに ELEC 会館の開館式に当たりまして、心からお祝いを申し上げますとともに、かくもりっぱな会館が竣工いたしましたことにつき、設立に携わりましたひとりといたしましてご関係の皆さまに厚く感謝を申し上げる次第であります。

この ELEC 会館の建設をみるまでにはいろいろの経過がございますが、その基盤をなすものは、昭和31年7月、学界の諸先生方と私ども財界の者が相よって、英語の教育と普及をはかる目的で創設されました English Language Exploratory Committee であります。幸い委員長には前日銀総裁の新木栄一氏のご就任になり、その他にも学界、財界の有力な方々のご支援をいただきまして、英国及び米国から英語教育界の権威者を招聘することができまして順調な出発をいたしました次第でございます。

次いで、昭和36年、文化及び教育に関する日米合同会議が開かれまして、それには私も参加いたしました。その場で、日本及び米国の語学教育、さらにその活動促進について討議が行なわれました。その決議に基づきましてこの ELEC の活用が取り上げられ、本会のウェイトが非常に高まった次第でございます。ここにおいて、かねてから事業をさらに進展せしめるためには、活動の本拠となります会館を建設することが必要であるということはいよいよ明確になって参りました。さらに、本日ご臨席のロックフェラー3世氏を始め、また国内の方々より多大の建設資金のご援助、また土地の提供などがありまして、かねての願望が急速に具体化することになったのでございます。本日ここにごらんの通りの会館がりっぱにでき上がった次第でございます。

ひるがえって、日本の最近の国際上の地位を見ますに、政治的には国連常任理事国としての地位を確保し、また経済的には、昨年IMF8条国に移行いたし、あわせてOECDにも加盟いたしまして、さらに文化的にも諸国との交流がいよいよ緊密となりましたことはご同慶の至りでございます。このように国際的にいろいろの面で交流が繁くなりまして、英語の必要性はいよいよ大となりまして日本人の語学上のハンディキャップが痛感される次第でございます。

幸い、このりっぱな会館が完成いたしましたので、過去9年余にわたる豊富な経験を生かして、今後一層活発な活動を展開し、さらに大きく飛躍されんことを衷心より希望してやみません。簡単でございますが、これをもって会館竣工のお祝いの言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

—Mr. E. W. F. Tomlin—

Representative, British Council

Speech

Your Excellencies, Ladies and Gentlemen :

I think it is very fitting, on an occasion such as this, to reflect upon the great responsibilities that devolve upon the English language in our time, because English has become a world language on a scale that no other language in the history of the world has attained before.

Just think a moment about the enormous expansion of English. The potential audience for the plays of Shakespeare was about 6,000,000 people—and when I say potential audience, of course, I am using that term literally, his actual audience was naturally very much smaller—but to-day the potential audience for the plays of Shakespeare is at least 350,000,000 people and about 250,000,000 of those people use English as their mother tongue.

Now when we think of the English spoken by this enormous number of people, we have to bear in mind the many varieties of English that are spoken; but I feel that this variety is a sign of health. There are many quips or jokes about the difference between English and the American English. It has been said, for example, that Great Britain and the United States are two countries divided by a common language. Well, it seems to me that my American friends can counterattack by pointing out that in at least one respect the American heritage has guarded the English language more securely than the British, because I think it has been established that the English of South Carolina is probably nearer to that spoken by Shakespeare than is the English of the present inhabitants of London.

At the same time there certain dangers inherent in

the fact of universality. There is no ideal English language any more than there is an ideal language of any other country. There are about 80,000 words in English, excluding derivatives; but these are simply the words recorded in dictionaries, and the English Dictionary is not the English language. Shakespeare used only about 25,000 words and Milton about half that number. The way in which they used them is what counts. In a sense, language exists only when it is being spoken, and if it is well spoken, the maximum amount of meaning must be mobilized behind the minimum number of words. It is one of the great facts about the history of English that it began to expand at the point of its maturity—that is to say, in the 16th and 17th centuries; and that is the reason, I suppose, why Shakespeare is the universal genius that he is, because he was able to use the language just at the moment when that language was ready for a mind such as his. We may also recall that the English people became interested in their language at that time; and it was one of Shakespeare's fellow-citizens of Stratford, Richard Field, who published a book called "The Art of English Poesy" by George Puttenham (1589) which was read by Shakespeare just at the crucial point in his career.

To-day we have to wage a perpetual war against linguistic deterioration. For language is rather like money; there is always the danger of inflation. Now, inflation has been defined as "too much money chasing too few goods". I think it could be said, therefore, that verbal or linguistic inflation consists of too many words chasing too little meaning. Mass media, advertisements, and the proliferation of printed matter are all potential dangers to the health of English. Words are symbols which must have cashable value—you must be able to realize them in purchasing power.

Now I conceive it to be the function—or one of the most important functions—of this organization to maintain the health of the English language. We wish ELEC continued success in this magnificent new building; we pledge its work our fullest support; and we wish all who study here good luck and—good English.

## The Hon. Edwin O. Reischauer

U. S. Ambassador to Japan

### Speech

Mr. Takeuchi, Mr. and Mrs. Rockefeller, Distinguished Guests, Ladies and Gentlemen :

It is a very great pleasure to take part in the dedication ceremony of this beautiful new building for the English Language Education Council, and it's a special pleasure for me because I have from the beginning been tremendously interested in the important and very fine work of ELEC and I had the privilege, early in the history of this organization, to have personal contact with its activities.

As you all know, back of the English Language Education Council, in a smaller and less certain stage of the history of this organization, it was known as the English Language Exploratory Committee and even back of that it had a history. I presume it started as the gleam in the eyes of the various people ; perhaps the most important eye in which this gleam appeared was that of Mr. Rockefeller, but it also appeared in the eyes of the various people in Japan. And out of this eventually a committee was formed, as I remember in the summer of 1955, to study the problem and look towards its solution.

I happened to come out to Japan just that summer and as I remember along about October, I was asked to join this committee in its meetings. There was still no ELEC ; this was an exploratory activity before the Exploratory Committee was founded, and we met almost every week there, I thought, for a while and I had the pleasure of being a part of this committee, the only non-Japanese member of it, and as I look around the audience I see the faces of the various other members of this group and I think they all feel the same thing I do—a great pride and great satisfaction that our early discussions and explorations have led to this very magnificent edifice.

I have always felt that the achievement of a more satisfactory level of English was among the most important problems that Japan faced. Certainly, it is of vital importance to Japan economically because the English language is the language of commerce and thus Japan's own economic well-being depends upon

mastery of English. But it is also economically important to the rest of the world, because Japan can make its economic and technological contributions to other nations primarily through the English language. It is vitally important for Japan culturally because English is the main language of contact with outside cultures and this contact helps enrich Japan ; conversely, it is important for the rest of the world because English is the major language through which the Japanese can make their cultural contribution to the world as a whole. And, of course, it is extremely important politically, because through the English language the Japanese can take their place in world councils and make their contribution to the achievement of peace that we all are trying to work toward.

And so the task that ELEC faces is a vastly important one and I think all of us who know about this organization feel that ELEC has already made a very great contribution to the achievement of this mastery of English that is so important to Japan and to the world.

ELEC is not alone in this effort to solve the English language problem in Japan but it stands out as one of the really successful efforts in this field, and all of us who are interested in the problem are grateful to the people of ELEC for what they have done. We join with them in rejoicing over this very important step forward in the history of ELEC. Thank you.

\* \* \*



# 日英両語の自・他動詞の比較

——日本語他動詞構文を英語に発表する際に

あらわれる困難点と困難度の予測と実証——

小池生夫

本論は主として日本語の目的語と他動詞の連関構造が、英語に訳出される場合におきる若干の型の喰い違いのもたらす正解への困難点と困難度を予測し、これを実証することを目標としている。この種の問題は、我々が日頃英語学習の際に直感的、経験的に気づいていることであるが、それが体系的に把握されれば、一層有意義なことと思われる。

論を進めるにあたり、その運びを示すと、1. 比較の視点 2. 自・他動詞の分析比較 3. 日本語他動詞構造の英訳のさいの困難点と困難度の予測 4. テスト 5. 証明 ということになる。

## 1. 比較

比較の視点をどこに定めるかは、その前段階にくる個々の言語の分析記述にも影響を及ぼすので大切な問題である。本論では比較の視点を2つの方面においている。その1つは日英両語における自・他動詞の対応関係をしらべ、両者の構造、機能の差を明確にする。この場合「行為者、行為、目標」又は「行為者、行為」という構造的意味が両者の共通点である。他の1つは日本語の他動詞文形式がそれぞれ具体的に持つ語義に対応する英語の文形式、つまり、英訳の際に訳出される文形式間の訳出上の困難度と困難点を日本語文形式との対比によって測定するために行なわれる比較である。前者が文法体系の対比につながれば、後者は英語教授の方法論の中に生きてくるものである。

## 2. 日本語の自動詞・他動詞

本論の主目的が、自動詞・他動詞の分析記述を述べていくことではないので、ここでは自・他動詞の記述については略記するにとどめる。日本語の動詞分類にあたっては、統語論的立場、形態論的立場が考えられるが、方法が網羅的で簡単である点、又比較上便利という点を考え併せて、前者のうち、助詞「を」をとるか否かを規準の第一とした方がよいと思われる。すなわち、文において名詞+「を」をとるのが他動詞、とらないものは自動詞である。「たつ」「たてる」などの形態的示差をもつ一対の動詞は国語辞典あ〜かまでの動詞中4.1%にすぎない又、受動態をとる可能性で自・他動詞をわける方法は、英語との比較を考えあわせると極めて有力であるが、具体的に考えてみると、英語ほど明確ではない。特定の名詞と動詞の結びつきに左右さ

れる。たとえば「毎日新聞は多勢の人に読まれる」は言えても「毎日新聞は彼女に読まれる」はどうであろうか。可能、不可能、その中間のケースがでて来てははっきりしない。日本語には英語の受動態に匹敵する形式もあるが、利害の受身と称されるのも、自・他動詞に可能である。しかしとにかく大きっぱに言って日本語の自・他動詞の特徴の1つはなすことになろう。そこで下位区分として、使役の「せる」「させる」をつける文の変換を行なう。すなわち、

- (A)  $\left\{ \begin{array}{l} N+ga+V\cdots(s)aseru \rightarrow N+O+V+(s)aseru \cdots\cdots(1) \\ N+O+V\cdots(s)aseru \rightarrow N+O+(s)aseru \cdots\cdots(2) \end{array} \right.$
- (B)  $\left\{ \begin{array}{l} N+ga+V\cdots(s)aseru \rightarrow N+ni+V+(s)aseru \cdots\cdots(3) \\ N+O+V\cdots(s)aseru \rightarrow N+O+V+(s)aseru \cdots\cdots(4) \end{array} \right.$
- (1)+(2)=(3)+(4)

$$N+ni+N+O+V+(s)aseru \cdots\cdots(5)$$

(5)の生成過程は(A)、(B)の2種類あるが、この(A)に区別される動詞は「を」を動作の通過・出発点とする、たとえば「(道を)行く」、「(島を)通る」、「(野を)あるく」などが考えられる。そして(B)は助詞「を」が目的を意味する動詞類と考えられる。これは国語辞典あ〜か中の他動詞としてあるものとの照合率98.5%であった。自動詞にもこれを転用しても下位区分できる。

## 3. 英語の自・他動詞

英語の自・他動詞分類の規準としては、受動態変換と目的格代名詞の代置が考えられるが、いずれも、すべてを含み切る優位性を保つことはできない。たとえば変換にあたっては、同族目的語をとる動詞、oneself などをしたがえる動詞、又 have, resemble, suit, befall などはその影響をうけないし、又代置から考えると他方、look at, laugh at などは他動詞句というより、自動詞+前置詞と考える方が妥当であるかという問題は残る。しかし、ここでは比較ということを考えて、なるべく近似した方法をとれるならとった方がよい。かくして動詞及びその代置語を全動詞から抜いた後目的格代名詞の代置の可否によって自・他動詞にわけ、下位区分として受動態変換、さらに Harris の *Cooccurrence and Transformation* の利用により seem to do, happen to do などの動詞句を別枠に考える方法をとった。その他の下位区分としては Nida, Chomsky などの文型中心主義的なやり方もある。

#### 4. 日英両語の比較

以上両語の自・他動詞の分類の概要を述べた。以上でいきさかその示差的特徴もわかったので、これにもとずき両者の対応関係を列挙してみたい。(1)両者ともいわゆる「行為者・行為・目標」の構造的意味を持ち、それが他動詞であり、他方「行為者・行為」の構造におきる動詞が自動詞と考えられる。しかし、この意味は実は漠然としていて、具体的には極めて処理があいまいになるのでシンタックス上の文型から分類した方がよい。(2)そこで、英語では動詞の次に目的格代名詞を前置できるか、日本語では動詞の前に名詞+「を」をとることができるかによって自・他動詞をきめる。(3)日本語では動詞分類は自動詞、他動詞の2区分と考えるが、英語では **be** 及びその相当動詞、動詞句 (**happen to do, begin to do** など) と共に自動詞、他動詞が存在すると考える。(4)日本語では形態上の示差的特徴によって自・他の区別が考えられる対の動詞も若干あるが、英語ではほとんどない。(5)個々の動詞は自動詞のみ、他動詞のみ、両用動詞種類にわけられる。英語では特に両用動詞が極めて多い。(6)自・他動詞と明確に考えられない中間動詞が英語にはある。たとえば **cost (ten shillings), last (ten days)** である。以上日英両動詞の比較対応した点を列挙した。これによってその類似点、相違点が明確になってきたと思われる。

#### 5. 日本語の他動詞構造に訳出上対応する英語の文型

さて、以上の日・英両語の自・他動詞の構造の対応関係をしらべた上で、日本語の他動詞構造 **N+を+Vt** の意味上対応する英語の表現形式の表現上の困難点と困難度を測定してみる段階をむかえた。我々がある外国語を習得しようとする際、その外国語の中で、日本語の類似した点を無意識にでも利用して覚えようとする心理が働らくのは証明済みである。外国語習得の際、その聴取と発表では、習得の過程がことなるのであって、本論のような発表を問題とする場合は、日本語の構造のもつ意味に類似した英語の構造の発表を問題とすることになる。今日本語の **N+を+Vt** が英語に翻訳される場合、どんな文の形式に訳出されるだろうか。そしてそのうち教授という実際の目的にそったものはどれほどあるだろうか。そのために語学教育研究所から発表されている *Active Vocabulary* 英語篇と日本語篇を利用した。そして日本語の他動詞構造にあたる英語の例をひきぬいて調べたところ、36種類、439例あった。又、行為・目標を意味する「**N<sub>1</sub>+に+N<sub>2</sub>+を+Vt** に」に対応する例が13種、76例あった。そのうち最も頻度数の高い順序から文の型式を書き出すと、**N+を+Vt** に対しては **Vt+N, Vi+P+N, Vt+Adv+N, Vt+N+Adv, Vt+N+P+N, Vi, Vbe+Adj+P+N, Vbe+Ved+P+N, N<sub>1</sub>+に+N<sub>2</sub>+を+Vt** に対しては **Vt+N<sub>1</sub>+P+N<sub>2</sub>, Vt+N<sub>2</sub>+P+N<sub>1</sub>, Vt+N<sub>1</sub>+N<sub>2</sub>** までが教授上問題になると考えられる。(なお、おくれればせながら **Vi** は自動詞 **Vt** は他動詞 (B), **Vbe+Ved** は動詞の受動態形, **P** は前置詞, **Adv.** は副詞, **N**

は名詞, **N<sub>1</sub>, N<sub>2</sub>** はそれぞれことになった名詞, 「を」と「に」は助詞で、いずれも目的を示すものにかぎる。既出のものもこれにしたがう。品詞分類は主に **Nida** にしたがう) としてこれらの文型の困難度を予測することになる。(ただし **N+Vi** [**I dream (私は夢をみる)**] は文の形式が簡単すぎてテストにならないので省略)

#### 6. 困難度と困難点の予測

すでに **Osgood** の言語心理学上の説や, **Lado, Kleinjans** にみられる仮説と証明などに示される通り、習得しようとする言語構造が学習者の母国語の構造との差によってもたらされる干渉の大きさは文の形式と意味分布の3者の総合に求められる。しかし、本論においては、干渉度の測定規準を主として形式と、その中の特定の位置にあらわれる要素の選択に中心をおき、それに形式のもつ意味を補足的に考えていきたい。それは、学習者の立場になってみた場合、文の形式のもつ意味よりも、その形式の選択と、その中の特定の枠にあらわれる要素の選択に問題が生ずることが大きいと予想されるためである。以下逐一予測を試みていく。

(1) 英語 **Vt+N** : 日本語 **N+を+Vt**

(例) **recover consciousness** 意識を回復する  
**manage a shop** 店を経営する  
**earn a lot of money** たくさん金をもうける

(a) 形式: 形式は明瞭にことなる。しかし見方を変えてみると非常に似ている。両者とも他動詞とその目的語たる名詞を持つ。英語が目的語代名詞前置の可能性をもつかわりに、日本語は助詞「を」をもっていることと、語順がちょうどひっくりかえしになっていることが差である。

(b) 形式内部の要素の選択: これは動詞と名詞が与えられれば問題はない。

(c) 意味: どちらも「行為者・行為・目標」の意味をもつ。

(d) 補促: 両者とも代表的な他動詞、目的語の文型で、語順の問題は学生は見なれているから問題はない。したがって干渉度は **O** と考えてよいが、或は他の **Vi+P+N** などと比べて考えがちがうかもしれない。

(e) 結論: 日本語の **N+を+V** を訳出する際の英語の文型としては困難点もなく、困難度もきわめてひくい。

(2) **Vi+P+N** : **N+を+Vt**

(例) **slip on the stairs** 階段をすべる  
**point to the problem** 問題を指摘する  
**jump across the brook** 小川を飛びこえる

(a) 前者にくらべて動詞と名詞の間に前置詞が入るだけ複雑。

(b) 動詞と名詞が与えられれば前置詞の位置にあらわれる具体的な語の選択が問題となろう。

- (c) 具体的な表現で必ずしも典型的な行為者・行為・目標にはならないだろう。
- (d) 学習者にとってこの句型にあらわれる動詞が自動詞であろうと他動詞であろうと問題ではない。又構造的意味の不明瞭は干渉にはならない。
- (e) 前者よりむずかしい。困難点は前置詞の選択。
- (3) Vt+Adv.+N : N+を+Vt
- (例) call in the doctor 医者を呼ぶ  
turn over the page ページをめくる  
pour out the tea お茶を入れる
- (a) 前の Vi+P+N とは機能上の差はあるが、学習者にとって Vi が Vt であろうが、P が Adv. であろうが、位置が同じである以上大差ないと思われる。もち論 Vt+N より複雑である。
- (b) 動詞と名詞が与えられる時、Adv. の位置にあらわれる具体的な語の選択が問題となる。
- (c) 「行為者、行為、目標」については問題はない。
- (d) Adv. が N の後にも生ずることが多いので、あるいは偶然そうやっても間違いにはならない利点がある。しかし前者とくらべての差といえば Adv. には P より強い stress が来ることである。しかしこれは発音上の問題なのでこの際は関係ない。
- (e) 前の Vi+P+N との困難度の差はない。困難点は Adv. の具体的な語の選択。
- (4) Vt+N+Adv. : N+を+Vt
- (例) blow my hat off 私の帽子を吹きとばす  
read the book through 本を読みおえる  
rub this word out この語を拭き消す
- (a) Vt+Adv.+N とは語順がことなる。しかし前述した通り、Adv. の位置は N が人称代名詞以外は交換がきくことが多い。それ故前者と本位的な差はない。
- (b) 前者に準ずる。
- (c) 前者に準ずる。
- (d) 今までにのべた Vi+P+N, Vt+Adv.+N, Vt+N+Adv. の3つの型は若干の形式の差はあるが、学習上有意味な差はみられない。
- (e) したがって、3者は困難度は同じで、Vt+N より高い。困難点は、分布上の問題で Vt (Vi) と N の間に一要素入ること、(又は Adv. なら N の後) 及びその具体的な法の選択である。
- (5) Vt+N<sub>1</sub>+P+N<sub>2</sub> : N+を+Vt
- (例) look me in the face 私の顔をのぞきこむ  
find fault with the weak points 弱点をあらさがしする  
lose sight of the treasure その宝物を見失う
- (a) 前のグループに比べて一層複雑になっている。少なくとも N が一個余計に増えているために、語順が複雑である。
- (b) Vt と N<sub>2</sub> にあたる語が与えられても、N<sub>1</sub> と P に

- それぞれ特有の語を選択させなければならない。
- (c) 結局、行為、目標に入ることになろう。
- (d) 例にあげた3例中、一見ちがう種類の形式であると思われる2組があるが固有の語連結をなしていることは変りない。
- (e) 困難度は前者よりさらに高い。困難点は、N<sub>1</sub> と P の位置に来る語の選択。
- (6) Vbe+Ved+P+N : N+を+Vt
- (例) be dressed in Japanese clothes 和服を着ている  
be convinced of his success 彼の成功を確信する  
be delighted with the news そのしらせをよるこぶ
- (a) この形式の後半+P+N は前者と同じであるが、前者が Vbe+Ved と受動態である点がことなる。これは(2), (3), (4)のグループより複雑であるが、前者との有意差はつけにくい。
- (b) 動詞原型と名詞があたえられた場合、能動態をとるか受動態をとるかの選択と、前置詞の枠にくる具体的な語の選択が問題となる。
- (c) 状態をあらわすか。決定には問題あるところ、しかし学習者はむしろ be+Ved+P に他動詞的意味を付与するのではないだろう。
- (d) 後述する2者とも同じグループをなすと考えられる。
- (e) 困難度は前者と同じ。困難点は語順と、内部の要素の具体的な選択にある。
- (7) Vbe+Adj.+P+N : N+を+Vt
- (例) be anxious about him 彼のことを心配している  
be thirsty for rain 雨を渴望している  
get angry at what he said 彼が言ったことを怒る
- (a) 前二者と同じに後半は P+N だが、前半が be+Adj. である点がちがう。しかし困難度に有意差があるほどのちがいはない。
- (b) これは品詞がちがうために形容詞があたえられなければ難しい。動詞や、名詞と間ちがえないように選択する必要がある。前置詞の選択はもちろん問題点である。
- (c) 状態の意味であるが、学習者はむしろ Vbe+Adj.+P で他動詞的意味を付与したくなるだろう。
- (d) 前二者と同じグループと考えてよい。
- (e) 困難度は前者と同じ。困難点は、主として内部の要素の選択の複雑性にある。
- (8) Vt+N<sub>1</sub>+N<sub>2</sub> : N<sub>1</sub>に+ N<sub>2</sub>を+Vt
- (例) pay you the money 君にお金を支払う  
give me medicine 私に薬をくれる  
throw him the magazine 彼に雑誌を投げてやる
- (a) 日本語は2つの目的語 N<sub>1</sub>, N<sub>2</sub> にそれぞれ助詞

「に」/「を」をとり、英語の  $N_1$ (間接目的語)、 $N_2$ (直接目的語)の機能にかわる役目を果している。

- (b) 英語で  $N_1$ ,  $N_2$ ,  $V$  があたえられれば、日本語に発表の際も問題はない。ただ日本語の  $N_1$ +にと  $N_2$ +をは語順を入れかえることができる点が間違いを招く困難点となるかもしれない。
- (c) 行為・目標
- (d) 意味は目標を2つ持つことでも同じ。形式は日英両者ともかわるが、なれば学習者には困難を感じさせない。
- (e) すべての前グループとの比較はできない。日本語の語順がかわっていたりすると問題がでてくる。しかし、全般にやさしいと思われる。

(9)  $Vt+N_1+P+N_2$  :  $N_1$ +に+ $N_2$ +を+ $Vt$

(例) provide his son with money 彼の息子にお金を与える

inform him of the plan 彼に計画を話す

supply them with food 彼らに食物を供給する

- (a)  $Vt+N_1+N_2$  にくらべて、 $N_1$  と  $N_2$  の間の位置に  $P$  がはまる。
- (b) 前置詞の位置の限定と、前置詞におきる具体的な語の選択が問題。
- (c) 主として「行為者・行為・目標」にはかわりない。
- (d) 形式である語順はちがうが、これに習熟している立場からは問題はない。
- (e) 前者とくらべて困難度は有意差をもって高い。困難点は前置詞をあやまらないよう選択する所にある。

(10)  $Vt+N_2+P+N_1$  :  $N_1$ +に+ $N_2$ +を+ $Vt$

(例) throw a stone at the dog 犬に石を投げる

spend enough money on my clothes 私の着物に充分のお金をかける

leave the message with my sister 伝言を妹にのこす

- (a) 前置詞が入ることは問題になる。その位置が大切。次に一見2つの名詞をとっているのは前の形式と同じだが、その配列が前の型とはことなる。
- (b) 前置詞の選択の問題と、前者にくらべて  $N_1$ ,  $N_2$  の位置がかわっているため、思わず前者の形式と同じ順序で語順を設定してしまうかもしれない。
- (c) 問題はない。行為者、行為、目標である。
- (d) この文型は、 $N_1$ ,  $N_2$  の分布と、前置詞の選択に問題点があるので前の文型より難しい。
- (e) 困難度は前者より高い。困難点は補促の説明にある通りである。

さて、以上で予測を終り、これをまとめてみると、次のようになる。

1. 日本語  $N$ +を+ $Vt$  に対応する英語の文型中、
- (i) 最も困難度のひくい文型  $Vt+N$
- (ii) やや困難度の高い文型  $Vi+P+N$ ,  $Vt+Adv.+N$ ,  $Vt+N+Adv.$

(iii) 最も困難度の高い文型  $Vt+N_1+P+N_2$ ,  $Vbe+Ved+P+N$ ,  $Vbe+Adj.+P+N$

2. 日本語  $N_1$ +に+ $N_2$ +を+ $Vt$  が対応する英語の文型中、

- (i) 最も困難度の低い文型  $Vt+N_1+N_2$
- (ii) 困難度がやや高い文型  $Vt+N_1+P+N_2$  (日本語  $N_1$  に=英語  $N_1$ )
- (iii) 困難度が最も高い文型  $Vt+N_2+P+N_1$  (日本語  $N_1$  に=英語  $N_2$ )

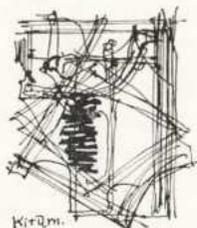
## 7. テスト

さて、これらの予測が妥当であるかを証明するために、実際にテストを行なって確かめなければならない。このテストは次のようにして実施された。

- (1) テストの方法：テスト結果の処理を明確にするため、できるだけ夾雑的を省くことに意を用い、その結果次の方法をとることになった。文型ごとに5又は10題の英語の簡単な短文を *Active Vocabulary* の例題から求め、それに日本語の訳も同書中のものを添付してプリントし、被験者に与え、1週間後テストをそのプリントについてやることを予告する。1週間後50分の授業時間に問題約75題を全部先にわたしたプリントにある順序をすっかりみだして英作文をさせる。その際、各問題中名詞と動詞の原型、形容詞を殆ど全部あたえ、その語を使って文を書くよう指示する。さらに1週間後、今度は突然、前回と全く同じやり方で再びテストを行なう。これは本来ならば、全く制限単語を与えずに課されるべきであるが、そうするとどのような文がとび出してくるか見当もつかないし、ましてデータの整理を考えると不安であった。それ故このような方法をとらざるをえなかったのである。このテストの性格は、したがって、文型の困難度、困難点を被験者の記憶の容易さ、確実さ、持続性と結びつけて判定するということになる。勿論理想的ではないが、英語の学習が、かなりの程度暗記に頼らざるをえない以上、望みうる範囲では妥当であると思われる。
- (2) テストの対象：被験者は都立高校2ヶ校の1年生男女計150名であった。これはある程度単語の量も習得してふえ、文型にもなれているが、まだ完全に習熟するには充分でない大体中級程度の学習者である必要からとりあげられた。テストの結果がよすぎてもわるすぎても差が出なくなるので、なるべく点差が変化に富む必要があった。彼らは全く協力的であったことを感謝している。
- (3) テストの処理：採点は本論の作製者がやった。採点範囲は、語順と、その型式内部での各要素に入るべき正しい単語の選択についてのみ行なった。綴り字の誤り、その他はオミットした。答案用紙300枚中、80%以上ミスのある用紙は棄てた。残り丁度200枚(各回100枚宛)について各問題11.2回毎に正解数をしらべ、読答の箇所を分類した。
- (4) 採点結果の評価：正解数の多い文型、その平均点が高い文型が困難度のひくい文型であると(P.46へつづく)。

## 水海道中学校

### の英語教育



ELEC 主事 山家 保

#### ELEC 研究協力校の背景

わが国の英語教育の効果を高めてゆくためには、新しい言語理論に基づく新しい指導理論と指導技術を研究・開発してゆかなければならない。このような考え方にたつて ELEC は、昭和37年度から採択・使用されるようになった中学校用英語教科書 *New Approach to English* を用い、この研究に協力してくれる ELEC 研究協力校を設置する構想をもっていたが、これに率先協力を申出られた学校が昭和37年度には2校あった。1つは日本女子大学附属中学校であり、その年の4月から発足した。もう1つは茨城県水海道市立水海道中学校であり、発足したのはその年の9月であった。

この2つの研究協力校では、*Oral Approach* に基づいて著作された教科書を用い、同じく *Oral Approach* に基づいた指導理論と指導技術を用いて一貫した英語教育を施すことを狙っているのであるが、生徒の学習に混乱を起すことを避けるため決して無理をせず、この研究は昭和37年度は第1学年の生徒だけについておこなわれた。そしてこの研究は、38年度には第1学年と第2学年、39年度には第1学年から第3学年までの全部の生徒に拡大していった。従って、本年の3月末になってはじめて、*Oral Approach* で3年間指導された生徒達が中学校を巣立っていったのである。

以上のことから、ELEC の研究協力校の現在までの研究の成果について、一応の中間報告をすることは極めて時宜に適したことであると思う。この点学年始めて極めて多忙な際に報告書をまとめて下さった水海道中学校の中山満寿男先生に満腔の謝意を表する次第である。日本女子大学附属中学校は立派な伝統をもった有名校であり、その英語教育も範とするに足る見事なものであるが、これについては

いずれ詳細な報告をする機会があると思うので、今回は中山先生の報告書を中心としてわれわれの考えていることを申し述べたいと思う。

#### 研究協力校訪問

ELEC では原則として毎月1回専門の主事を研究協力校に派遣して研究に対する助言と指導をおこなっているのであるが、その日程は大体つぎのようなものである。まず研究協力校の英語科の先生全員の研究授業のあと、ELEC 主事が実演授業をおこない、そのあとで全員の研究授業に対する詳細な批評・研究がおこなわれるのである。この場合の *discussion* は、それぞれの授業の教授細案および実際の指導の詳細な記録に基づいておこなわれるのである。ときには、ある特定の問題をとりあげて *discussion* をすることもあるが、中心はいつでも実際の研究授業である。ELEC 側も研究協力校側もつねに研究授業を中心として、お互いにはだかになって切磋琢磨することを信条としている。

#### 水海道中学校

水海道市は茨城県の西南部、常盤線の取手から北上する常総筑波鉄道の沿線に位する農村地帯にある小さな都市である。従って水海道中学校は、一般の公立中学校に共通な長所も短所もそなえた、いわば日本の農村地帯の典型的な中学校の1つということが出来るであろう。このような環境におかれている学校がわが国には非常に多いという点からも、この中学校での実践研究の成果は他の多くの中学校に大いに参考になるであろうと考えられる。

一体1つの学校の英語教育が成功するためには、英語科の職員が一体となって研究・協力してゆくことが絶対に必要であってどれほどひとりひとりの先生が立派であっても、

その指導理論なり指導技術がそれぞれ異なった方向をさし  
ていては、全体としては決してよい結果は得られるものでは  
ない。職員のひとりひとりがすべて立派な専門家ではな  
くとも、お互に協力し、お互に切磋琢磨してゆけば、おの  
ずから研究の成果はあがるものである。

この水海道中学校は誠に立派である。校長の堀越通雄  
先生の卓越した指導力のもと、英語科主任の中山満寿男  
先生を中心とした英語科のまとまりは誠に見事である。こ  
れだけの協力態勢が出来ていれば、この実践研究の成功は  
まず当然といっても過言ではないであろう。この協力態勢  
を更に強固たらしめるものとして見逃してはならないこと  
は、このような態勢は単に水海道中学校だけのものではなく、  
水海道市内の6つの中学校が全部この実践研究に協力して  
いることである。このことは昨年12月2日水海道中学校を  
会場として開催された英語教育研究大会には、市内の中  
学校全部がその研究授業を公開したことで明らかである。  
当日の研究授業10クラスは全部 Oral Approach であつた。  
ここに水海道市中学校英語教育研究会（会長 市内豊岡中  
学校長 秋葉六郎氏）の会員の先生方に心から感謝の意を  
表したいと思う。

#### 実践研究の成果

本誌の別稿で水海道中学校の中山満寿男氏の発表された  
研究の成果はつぎの点で誠に貴重なものと言えるであろう。

- (1) この成果は1つの公立中学校の先生方が1つにま  
とまって、1つの方法を3年間継続し研究した結  
果であること。
- (2) この成果は地域的に決して恵まれたとは言えない  
農村地帯で、しかもひとりひとり決して英語を  
専攻したいいわゆる専門家ではない公立中学校で達  
成されたこと。
- (3) 従つてこの成果は、この学校と同じような環境に  
ある多くの公・私立中学校でも達成出来る可能性  
を多く含んでいること。

1つの学校の英語教育が成功しているかどうか、成績が  
あがっているかどうかを科学的に正確に測定し、評価する  
ことは非常に困難で、これは不可能に近い。然しながら普  
通の中学校に見られる共通の特徴や傾向を種々の観点から  
比較検討することに依つて、1つの学校の英語教育を、  
positively には出来なくとも、negatively にはかなりな程  
度まで正しく評価出来ると思う。このような観点から中山  
氏の報告書を(A)生徒の興味・関心の調査、(B) Written  
test の月別、学年別調査の2つを中心として評価してみたい  
と思う。これらの調査は中山氏の報告書にもあるように、  
昭和37年度入学の生徒達が3年間の Oral Approach に依  
る指導を受けて、本年3月卒業するまでの記録である。

#### (A) 興味・関心の調査

この指導法が成功をおさめるためには、生徒諸君の協力  
ELEC BULLETIN

がなければならぬが、この指導法はどの程度生徒に受け  
入れられているのであろうか。第1学年のときは「よいと  
思う」と答えたものは全体の29.5%に過ぎなかったが、第  
3学年になったときにはそれが62.3%と約2倍にふえてい  
るが、「よくないと思う」、「わからない」と答えたものは、  
第3学年ではそれぞれ第1学年のときの約半分に減ってい  
る。第3学年になると、教材も複雑でむずかしくなり、英  
語の勉強もつらくなるのが普通であるが、それにも拘らず  
この指導法は次第に生徒達から支持されてきていることが  
わかる。

この指導法では、その日に学習した教材はすべて、す  
らすらと暗誦が出来、また本を見なくても書けるようにな  
っていることを毎日の宿題としているのであるが、このよう  
な一見残酷(?)に見えるような家庭における復習を生徒達  
はどのように受けとっているのだろうか。この調査に依  
ると、そのような家庭における復習を「負担に感じない」と  
答えている生徒が、第1学年では61.5%であつたものが、  
第2学年では81.1%となり、第3学年では実に85.9%とい  
う数字を示しているのである。この数字は誠に驚くべきも  
のであり、去る2月23日に ELEC 会館落成式をおこない、  
その展示室でこの数字を表で展示したのであるが、ある英  
語教育の専門家が言下に「Unbelievable!」と評したのも  
「むべなるかな」と思った次第である。

このように85.9%もの生徒達が、上に述べたような宿題  
を負担と感ぜずに毎日繰り返しているとするれば、積み重  
ねの学習である英語の学習はこれだけでも成果があがるこ  
とは当然である。さきに述べたように、この指導法が生徒  
にかなりよく受け入れられ、しかもこのように一見困難と  
も見える宿題を難なくやりとげているところに、この学校の  
生徒達が英語に非常に興味と感心をもってよこんで参  
加している姿ははっきりと見られるのである。普通の学校  
では学年が進み、教材が複雑でむずかしくなるにつれて、  
いわゆる英語から脱落してゆく生徒がふえる傾向があるの  
にも拘らず、この学校ではそのような傾向はみられない。

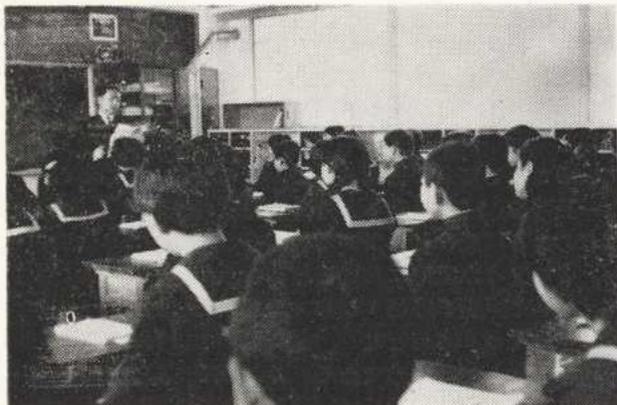
さてこのような宿題をかたずけるのに要する家庭学習の  
時間はどうかと見ると、30分以内と答えているものが、第  
1学年では82.0%、第2学年では71.5%である。第3学年  
になると、高校進学という問題もあり、生徒の学習時間が  
ふえ、30分以内が42.3%、1時間以内が46.3%となってい  
る。

それでは、このような一見困難と思われる宿題を、なぜ  
この中学校の生徒達はそれほど負担と感じていないのか  
について、少しく核心にふれてみたいと思う。これには2  
つの問題が含まれている。それは(a)「なぜ暗誦が苦痛で  
はないのか」と(b)「なぜ書くことが抵抗にならないのか」  
である。

(a) なぜ暗誦が苦痛ではないのか。

この指導法では、新しい語彙や文法項目はすべて英語の  
文脈の中で導入し、抽象的なむずかしいもの以外の導入に  
は殆ど日本語を用いないし、又生徒にも日本語を言わせる

ことは殆どない。導入したものは、いわゆる mim-mem を通して何度も繰り返して口頭で練習し、言えるようになったら理解を check するために、英語の問いに英語で答えさせて、口頭練習した新しい項目を理解しているかどうかだけではなく、英語の文脈の中で正しく用いられるかどうかをも check するのである。



オーラル・アプローチによる計画的な授業で、クラス全体で口頭練習している茨城県水海道市立水海道中学校の生徒たち。

このあとで本時の新教材全体の reading に入るのであるが、ここでは少なくとも7~8分、主として choral reading で全体がそろって、大きな声で、はやく読めるようになるまで drill するのである。これだけ口頭の練習をし、reading を続け、しかもそのあとで更に文脈全体を理解しているかどうかを check する英問英答をしておけば、家庭で暗誦してくるための準備は十分なされているといつてよいであろう。ここで大事なことは生徒の英語に speed のあることである。speed がなければ、どれだけ時間をかけてもそれほど練習量はふえない。生徒に実力がつくかどうかは生徒の練習量に依るのである。

(b) なぜ書くことが抵抗にならないのか。

この指導法では第1学年の第1学期の初め、Lesson 1 から、生徒の学習上の抵抗にならないように筆記体を、少しずつ、本当に徐々に導入してきている。このようにすると大体第1学年の第1学期の半ば頃——すなわち5月の中旬から下旬にかけて生徒は一応筆記体で書けるようになるが、なお書き方の指導は第1学期の終わりまで、毎時間10分程度の時間をかけて指導を続けてゆけば万全である。従って第2学期以後は特に毎日の授業の中で writing の指導をする必要はなくなり筆記体で英語を書くということは生徒にとって大きな抵抗にならずに身につくのである。しかもその上毎時間 written test をして生徒が確実に書く練習を続けさせているのである。このような指導をうけている生徒の書く力が一番よくあらわれるのが毎時間おこなわれる Written test の答案である。ここに書かれている英語は力強く、正確で美しい。さきにも述べた ELEC 会館落

成式のときに展示された生徒の答案を見て、「これは penmanship の答案ですか。」と問う人さえあったほどである。

以上のような準備があれば、記憶力が一生のうちで最も旺盛な中学生にとってこのような宿題がそれほどの負担にはならないことは理解出来ると思う。

(B) Written test の月別・学年別調査

この指導法の狙いは、いわゆる完全学習である。完全学習とは、学習した教材を聞いてわかる、読んでわかるというだけではなく、口頭でも発表出来るし、またそれを書いても発表出来るということである。

毎時間おこなわれる written test の狙いは、生徒が家庭で暗誦してきた英語を、pattern-practice の (a) variation と (b) selection とを通じて更に拡充・強化したあと、これが果して書いても発表出来るかどうか check をすることである。このような発表度の最も高度な test では、完全学習がどの程度達成されているかを見るのには最も便利である。

この調査表で見ると、第1学年で最初に Oral Approach を実施したときはA(5点)が僅かに9.6%であるのに対してE(1点)のものは50.7%もあったのである。つまり完全学習の程度が0に近い生徒が50%以上あったのである。これでは完全学習の達成度は決してよくはない。しかしこれが第1学年の終りになると、Aが25.5%、Eが19.7%、第2学年の終りでは、Aが32.1%、Eが9.9%、第3学年の終りでは、test 回数僅かに3回という3月は別としても、2月の数字はAが50.8%、Eが僅かに5.2%となっている。AとEとの割合は第1学年の初めのとときと全く逆になっているのである。第3学年に入って、本校と分校が統合になったり、また教材が第2学年に比して大分複雑でむずかしくなっているにも拘らず50%以上もの生徒が完全学習を達成しており、しかもEという成績不良者は僅かに5.2%である。大体日本の公立の中学校の生徒の18.67%は精薄ならびに border-line cases だと言われているのであるが、この学校の第3学年でも、Eとその上のDの成績のものを合わせても6%を少しく越す程度におえているということは誠に偉とすべきことであると思う。

筆者は今から約10年前「Pattern Practice と Contrast」(昭和31年開隆堂発行)という著書のなかで、昭和29年から始められた当時の宮城県の研究指定校が出した data に基づいて、これら Oral Approach に依る指導をおこなっていた学校では、教材が複雑で、むずかしくなるのに逆比例的に生徒の発表力は向上していったことを報告したが、今この水海道中学校が出してくれた data を見ると誠に感慨無量で、水海道中学校の先生方のご努力には深甚なる感謝の意と心からの敬意とを捧げずにはおられない。

\* \* \*

# ORAL APPROACH の実践研究

— 第 3 年目を終って —

中山 満 寿 男

—はじめに—

本校が ELEC (財団法人英語教育協議会) の研究協力校として Oral Approach の実践研究に入ったのは 1962 年の 9 月のことであった。この実践研究の成果については、中間報告として 1963 年度末までの分を *ELEC Bulletin, No. 11* (July, 1964) に「ELEC 研究協力校報告 運用力を高める指導と実践」として発表したのであるが、今回はこの中間報告書を補足すると共に、特に 1962 年度に第 1 学年に入学した生徒達が、今年 3 月中学校を卒業するまでの 3 年間の学習過程・学習方法およびその評価に焦点を合わせて、その経過を報告したいと思う。本校の英語の教材はもちろん *New Approach to English* である。

公立中学校における外国語の指導は、限りある授業時間のなかで、特定の生徒に対して、特定の能力だけを指導することをねらっているのではない。全生徒に、特定の能力に片寄らず Hearing, Speaking, Reading, Writing の Ability のすべてについて、しっかりした基礎を養なわせなければならないのである。そこで個人差、能力差のはな

はだしい公立学校である本校の実態から、生徒の心理、特性、経験、環境などに即して従来の教材と指導法との両面を再検討してみた。

その結果、具体的な問題として、つぎのようなものが提起された。

(1) 能率的に、しかも効果のあがる指導法にするためには、従来の指導法・指導過程のどこに欠陥があり、改善しなければならないか。

(2) 生徒の学習上の抵抗を分析して、これを最も少なくするため工夫する点はなにか。

(3) 教師の指導経験の多少を問わず、だれもがたやすく実行できる指導の手順を作り上げられないだろうか。

(4) 最大の学習効果を挙げるためには、どのような教材とどのような教材の配列が必要か。

(5) 生徒に、親しまれる英語学習、そしてそれに慣れさせていくのにはどのような授業形態であればよいか。

このような問題に対して、数かぎりない討議と研究を重ねながら、1962 年 9 月から 1965 年の現在まで、本校は ELEC の研究協力校としての実践研究を続けてきているのである。

## 1. 生徒の興味・関心の調査

調査項目	学年 年次平均 答%	第 1 学年	→ 第 2 学年	→ 第 3 学年
		1962・12	1963・11	1964・12
現在の授業の進め方についてどう思うか	よいと思う	29.4	42.2	62.3
	よくないと思う	20.4	19.2	11.0
	わからない	50.2	38.6	26.7
復習に負担をどの位感じているか	感じている	38.5	18.9	14.1
	感じていない	61.5	81.1	85.9
毎日家で復習しているか	している	12.0	19.8	49.8
	ときどきしない	74.4	68.0	41.1
	全然しない	13.6	12.2	9.1
帰宅後の復習をどの位しているか	30 分以内	82.0	71.5	42.3
	1 時間以内	17.0	27.2	46.3
	1 時間以上	1.0	1.3	11.4

(学級別調査内容は *ELEC Bulletin, No. 11* を参照されたい)

この調査は、1962年度入学の生徒に対して、1962年12月、1963年11月、1964年12月と、連続3か年にわたって毎年実施したものである。第1学年から第2、第3学年と指導が深まり、さらに教材がむずかしくなっていくその過程において、生徒たちの英語学習に対する興味と関心がどのように変化していったかがよくうかがわれると思う。

以上の3か年にわたる同年度の生徒325名に対して、比較調査をしてみて興味のあることは、1962年12月、すなわちELEC方式の指導をはじめから3か月目の調査によると、生徒の感想は、「よいと思う」と答えた生徒は325名のうち、29.5%であった。それが1963年度(約1年後)には、42.2%にふえ、さらに1963年には62.3%になったことである。また「わからない」と答えた生徒が最初は50.3%の約半数であったのが、第3学年になると26.7%になり、「よくないと思う」と答えたものが、最初は20.5%だったものが、最後には11.0%になったことも、教材がむずかしくなり、しかも高学年になると英語に対する興味やうすらぐのが普通である点を考えると、この指導法がよく生徒に受け入れられてきていることがうかがわれる。

更に家庭における学習の状況のみをみよう。次の授業時間までに、毎時間、学習した教材を全部暗唱して書けるようになっていくことを宿題として要求しているのに対して「負担に感じていない」と答えた生徒が、最初は61.5%、第2年目が81.8%、第3年目が85.9%となり、大多数の生徒がこの学習方法を負担と感じていないことがわかった。

しかも英語の復習に対して、時間的にみても第1学年では30分以内が大部分の生徒、第2学年、第3学年に進むに

つれて、進学、その他の関係もあり、少しずつ、1時間、2時間と学習する生徒も出てきている。これは全体から見ると、ごくわずかである。このように、英語そのものの学習は、大体全生徒が30分～1時間程度で、復習や宿題に余り抵抗を感じていないという結果があらわれている。

従来のように英語の学習に、失望した様子もなく、興味を持って毎日の学習に参加している姿がみられる。

これはとりもおきず、教材そのものが他の教材と比較したときに暗唱し易くできていること、それに聞く、話す、読む、書くの領域で、balanceのとれた完全学習をねらった指導法の結果でもあると言えよう。

## 2. Written test の成績調査

毎時間習慣的に実施しているこのWritten testは、前時限学習した教材(新出語・句・句型など平均して、5～7)を全部暗誦し、また書けるように要求しているものである。これは生徒が暗誦し、書けるようになってきた文を、Pattern-practiceを通して深め、書くことによってさらに正確に身につけさせる手段でもある。

また教師の立場からみて、生徒の学習がどの程度まで完全学習に近づいているかをみることに、前時の指導に手ぬかりや弱かった指導の面がなかったかなど自らの指導の評価資料にすることをもねらっているわけである。

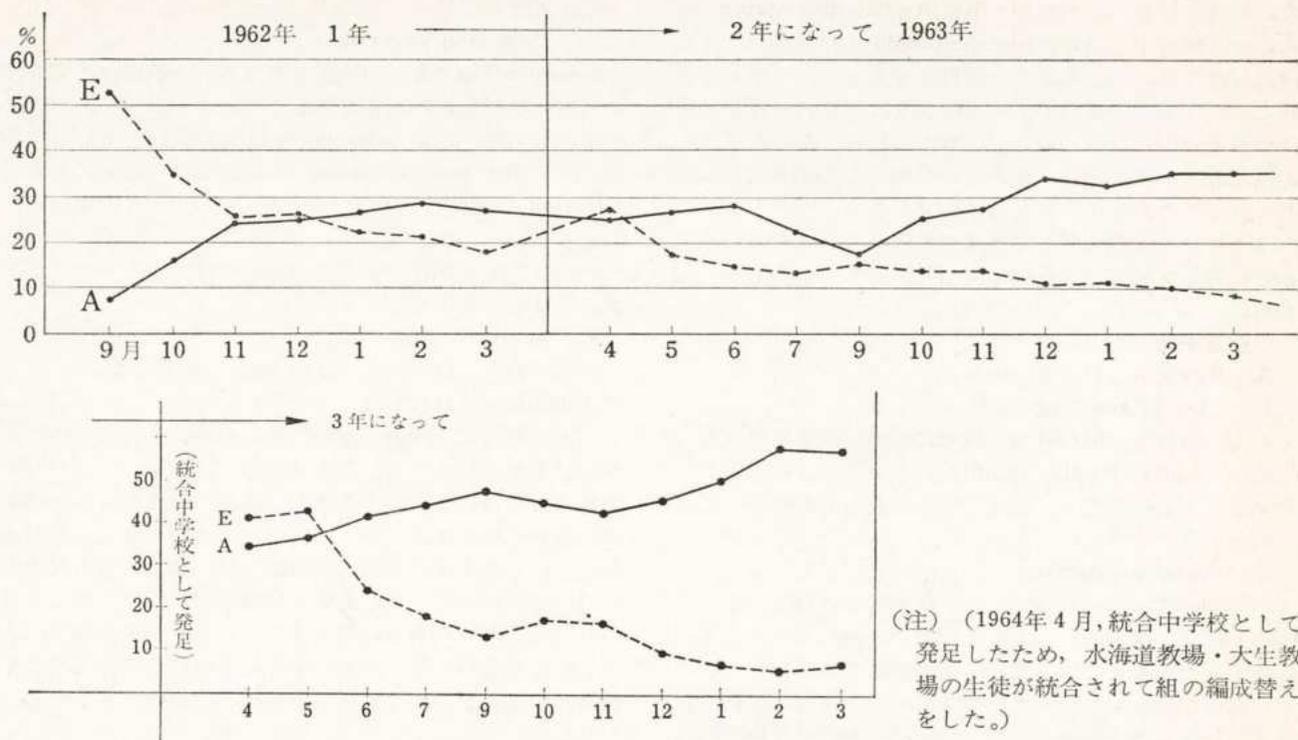
次の表は、前項の生徒にたいして実施したテストの月別平均成績表で、1962年9月から同一生徒に1965年3月まで実施した結果を示したものである。

(A) Written test 月別平均成績表 (1962年→1965年)

学 年 段階	月	第 1 学 年							第 2 学 年 に な っ て											
		9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	
A	% (5点)	9.6	16.5	23.7	24.3	26.4	29.3	25.5	23.0	25.1	28.3	20.9	19.3	23.9	28.5	31.7	30.2	33.5	32.1	
B	(4点)	12.3	18.4	20.6	23.0	22.0	20.7	24.1	19.5	21.7	20.9	27.3	24.9	20.1	25.4	22.1	24.7	24.1	23.7	
C	(3点)	10.3	14.1	16.0	16.8	17.0	18.9	22.0	19.5	15.6	15.7	19.8	20.4	27.4	25.0	24.1	27.3	20.3	21.4	
D	(2点)	17.3	15.5	13.8	9.3	13.4	10.1	8.7	14.1	19.4	20.0	18.9	20.1	16.4	9.0	11.1	6.1	11.9	12.9	
E	(1点)(0点)	50.5	35.5	25.9	26.6	21.2	21.0	19.7	23.9	18.2	15.1	13.1	15.3	12.2	12.1	11.0	11.7	10.2	9.9	
test	回 数	7	14	14	9	9	11	8	7	12	14	8	10	15	19	17	14	16	13	

第 3 学 年 に な っ て										
4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
32.0	33.1	39.6	40.9	42.2	40.0	38.2	39.0	41.3	50.8	47.1
11.0	13.2	10.5	19.8	16.1	22.0	20.4	21.3	19.0	22.0	26.8
6.3	7.3	9.1	11.3	27.9	23.0	25.1	25.8	30.1	20.3	19.7
13.0	8.2	16.3	9.3	2.4	2.0	1.8	4.1	2.4	1.7	0.6
37.7	38.2	24.5	18.7	11.4	13.0	14.5	9.8	7.2	5.2	5.8
4	13	16	12	14	18	19	11	12	8	3

(B) Written test 月別平均成績グラフ



(注) (1964年4月, 統合中学校として発足したため, 水海道教場・大生教場の生徒が統合されて組の編成替えをした。)

以上の test の結果は, 同年度の生徒の3か年にわたる学習過程の記録であり, 私たちにとっては貴重な資料である。

この結果の分析は, 生徒ひとりひとりの学習過程, class ごとの学習過程とこまかくわけてみるのもっとその価値があると思うが, 紙面の都合上学年ごとの比較にとどめ, 機会があれば後日発表させていただきたい。

第1学年では, 前時の教材, すなわち Pattern-practice の variation, Selection で口頭練習をした文のなかから平均して5問出題, 第2学年では4問~5問, 第3学年では3問~4問を出題している。これは単なる dictation ではなく, 発表度の一番高い英文を書く test である。絵や実物, また英語で場面などを示して, これを英語で書かせたり, 日本語を言って, 英文を書かせたり, ときには, 英文の問いを言って答えを書かせたり, 答えを言って, それを引き出す問いを書かせたり, その出題方法は多様である。

採点法は, 全正解をA, 1~3語の誤りのものをB, 4~6語の誤りをC, 10語までの誤りをD, それ以上の誤りをEとして, 5段階を定め, 学年共通にして, 教師が採点し, 答案はなるべくその日のうちに生徒にかえすことを建て前とした。この採点に要する時間は, 経験にもよるが50名単位として平均10分~15分位である。

1962年の9月以前は ELEC 方式ではなく, Writing の指導も第2学期から筆記体に移したようなこともあって, 9月最初の結果は余りよくなかった。しかし生徒もこれに馴れ, 教師もだんだん指導法の研究が深まるにつれ, グラ

Fの統計に表われたように, 月ごとにその成績が向上してきた。最初最下点のEが50.5%もあったのが, 2か月後には, 25.9%に減少し, 第1学年の終わりには, 19.7%と大幅に減少している。最上点のAについてみても最初は9.6%だったのが, 2か月後には急上昇をたどり, 23.7%, 学年末には25.5%となり, EとAが逆になっている。この同じ生徒が第2学年に進級し, Aが32.1%, Eが9.9%, 第3学年に入ると, 水海道教場と大生教場の生徒が統合合併になったけれども, 学年末にはAは47.1%, Eは5.8%と向上し, この春卒業して, ある者は高校に進学し, ある者は社会の第一戦に職業人として出発していった。このように学年が進むにつれ, 英語の構造が複雑になりむずかしくなるのに反比例して, 生徒の英語の運用力, 発表力が確実に伸び向上していることを, この data は示している。玉石混淆の公立学校の生徒でも, よく選択, 配列された教材を用い, 言語学的に正しい学習作業を通し, しかも教師が一貫した学習指導をつづけているならば, 学力は確実に向上するものであることを確信させられたわけである。

#### —能率的な学習指導とこれから—

英語の学習指導の効果を高めるためには, 教材も指導法も, 生徒の学習上の抵抗を出来るだけ少なくするように工夫されたものでなければならない。

(山家 保 著「新しい英語教育」参照)

この点から考察してみてもわかるように, 教材はなんと

いっても、言語学的に正しく選択・配列されている教材でなければならない。すなわち項目中心 (item-centered) のものより構造中心 (structure-centered) に置きかえられなければならない。このような教材の考え方から、指導の手順においても、一貫性のある言語学的に正しい一連の学習作業が絶対不可欠のものとして考えられる。この教材とこの指導法の確立、それに加えて一貫してこの指導法を継続してゆくことが成功をもたらすのである。

これまでの実践を通してきずきあげた今日までの成果をさらに向上発展させる意味で反省と改善すべき私見を付記したい。

### 指導手順

#### A Review (15—20min.)

##### 1. Choral reading

前時の教材を chorus で、教師について読ませてみて、生徒が clearly, loudly, rapidly によめるか、特に正しい音調とリズムに注意して読んでいるかをたしかめることが大切である。

##### 2. Pattern-practice

Pattern-practice については、相当研究されているが、毎時の授業で継続的に、しかも正しい理論によって立てられた手順をふまえていっているかが問題である。

一応の理論、型を知っていても、それを実際に生徒に指導するとなると、教師の技術といわれる pattern 作りに苦勞することがある。この指導法を取り入れての第1のつまずきはこの壁につきあたることであろう。しかしこれも近々発行予定の ELEC 教材委員会編 *Teachers' Guide* によってすべてが解決されるはずである。

##### (a) Variation exercises

substitution (代入), conversion (転換), expansion (展開) の練習であるが、絵、実物、単語など既習のもの、身近にあるものを cue として示して、situation の変化を示すだけで、全文を言わせることに注意することが大切だ。このときの speed と intonation, rhythm の正確さもまた同様である。指名した生徒が、ゆっくり考え考え発表して、たとえ正しく言えたとしても、それは Pattern-practice ではない。瞬間的にできることが、大切なねらいであるからだ。

反射的に言えるように、しかも1人にたくさんのをやらせて、その間、他の生徒たちはぼんやりしているようではいけない。数多くの pattern の準備と、出来るだけ多くの生徒にあてる工夫が大切である。もしもつまずいて出来なかったら、教師が cue なり、正答をすぐに教えて repeat させることがむしろ効果があるようだ。

この drill を、10分間に平均して60~80の sentences をそれぞれ最初は個々の生徒に言わせ、ついで chorus で repeat させている。pattern の量を平均して毎時間80~100にのぼす努力をつづけている。これには speed を出させる工夫が必要である。一例を上げると教師が「大きな声で」というより「speed」と指示することが結果的には、大きな声になり、speed を出すもとにもなっているようである。

このような経験を生かすことによって、さほど困難でなく実現が可能だと思っている。

##### (b) Selection exercises

Selection exercisesの問題であるが、一般には高度な技術・内容と考えられがちである。

しかし実際にこの selection を毎時間継続していってみると、生徒たちが variation の練習よりも変化にとんだ selection の練習により多くの興味と関心を示しているのにおどろいている。

やはり教師の都合(?)でこの練習をはぶくようなことがあってはならないと思う。

### 3. Written test

前項でのべておいたが、この test は単なる単語、英文の dictation ではないことである。

とかく英作文は困難と言われているが、本校ではその反対の結果を示している。この ELEC 方式によると、writing の力がおとるといふきびしい世論(?)があるが、writing をおろそかにあつかっているなどということは少しもない。むしろ生徒にとって、残酷な位、強く練習が要求されている事実を知らない表面的な理解者の発言であると言いたい。この writing の力をさらに向上させる意味で、ことしから前時の教材のなかの重要構文だけの英作文でなく、新単語、重要単語も日本語による指示で test することにした。

採点についても、語数による評価でなく完全な文によるものにあらため、writing の強化に努力をしている。これだけ追加しても、test に要する時間には変更なく、現実には手前みそになるかもしれないが、昨年よりも結果において向上している状態である。すでに4月末には新入生が筆記体で writing の drill をし、test を受けている。ノートの使用は各クラス平均2~3冊を終了している。この点従来一般的に行なわれている入門期の指導方法を新しい角度から再検討してみる必要があるのではなかろうか。

#### B Presentation of the new material

(10—15 min.)

(1) Oral introduction

(2) Mim-mem

(3) Check of understanding

本時の新教材の導入と、その範囲についてであるが、よく質問されることは、この位の量で進度の点に心配はないかということである。New Approach to English の1964年度の進度状況は、第1学年用、3月初め終了。第2学年用1月末終了、第3学年用3月中旬終了という結果である。毎時新語3~5程度、句、構文は1~3程度を保っている。記憶力旺盛な中学生時代にすくない量と考えられ勝ちであるが、確実に記憶させるためには、この原則はあくまで守ることが大切である。

時には数ページも読むだけ、訳すだけの授業形態に進むことは、生徒たちに、混乱をおこさせ、英語学習に対する興味を減退させる原因ともなるであろう。

新しい語句・構文については、1つ1つ理解をたしかめて進む指導、「わかったね」でおわらず、「できる」ことを確認して進める指導が必要である。

ここでも量や進度を気にして功を急ぐよりも、一步一步確実に進める工夫と努力をつづけたいと思っている。

#### C Reading and check of understanding (15min.)

1. Reading of the day's text
2. Check of understanding

新語や新しい構文の本時教材の reading であるがこの頃の10~15 min. の指導が、とかく教師にとって忘れがちになるのか、実際の場ではおろそかになり勝ちなのである。chorus で一応そろって speedy に数回程度は読まれるのだが、もう一步と言うときにおわってしまう傾向がある。この reading はやはり sentence を1つずつとりあげて、全体がそろって、早く、大きな声でよめるようになってから次の sentence に進むことを忘れてはならない。

不確実な reading の drill が次の時間の復習に相当影響することが体験上わかっている。

本年度は、この時間の reading にも努力するとともに、朝の学習、休み時間、放課後の生徒の reading の drill のために、エンドレステープの活用について研究を進めている。

次に本時に新しく導入した教材全体についての check of understanding であるが、これも事前に計画し、準備しておかないと忘れ勝ちになる。読む練習で終わってしまい、しめくりがなされなくなる。ただここでは teacher-questions and pupil-answers でどの程度本時の教材の内容が理解されているか、また運用が出来るかを check するのが原則である。

しかし、日本語に訳しなさいという項目は、「指導要領」にはのっていないが、本校の地域・環境からみて重要構文、新語・句についてどの程度理解されているかを日本語で check することが時にはあってもよいのではないかと考えている。

#### D. Consolidation

各学習作業の時間に多少の誤差が出来ることは、機械でない限り当然である。この時間をその誤差の調整にあたりして、授業のバランスがとれなくなるようなことがなくしてある。しかしこの時間を一面本時に導入されたことからのうち、重要な文法事項の日本語による解説なり、writing の指導（これは各学年にする）などにあてるように確保することも、paper test が現実の問題として、現社会の要求とは別に残っていることから考慮せざるを得ないとも考えている。

これらの実践研究は、さらに研究と改善を加え生徒の学力向上に資したいと努力しているわけである。

わが水海道市では、市内の中学校6校が全部この指導法の協同研究に参加しているのであるが、昨年12月2日にその中間報告を兼ねて、この6校が全部参加した研究授業を水海道中学校を会場として公開した。当日は広く県下から、

遠くは北海道、関西地区からも多数の先生方が来校され、誠に有意義な研究会であった。この研究の反省と改善を含めて、参会の先生方にアンケートをお願いした結果、多数の方々のご意見が次のようなことばでとどけられた。

#### ○アンケート

1. この研究会全体にたいするご感想。

- 無駄のない授業で、長期間の研究の成果が認められた。(勝田中)
- 研究会全体に活気があり、細部について気のくぼりがあってよかった。(土浦2中)
- 未曾有の熱の入った研究授業で、本当に痛快であった。(谷田部中)
- 限られた時間を最大限に活用し、しかも point をおさえた授業であった。(田水山中)
- 統率のとれた授業に接し、ただすばらしいの一語につける。(桜川中)
- 討議の時間をもう少しとって欲しかった。(南中)
- やわらいだふん囲気、内容的にも中味があってよかった。(山王中)
- 先生方の熱意ある授業に感謝をささげたい。ただし質疑応答の時間をもう少し欲しかった。(平磯中)
- 全校、全市あげての協力体制と研究成果の発表に心をうたれた。この研究をつづけられた成果を広く普及されたい。(下館3中)
- 教職について、ことして12年、各種の研究会、講習会に出席しましたがこれほど強い感銘を受けたことはない。(上野中)
- たいへん、活気のある新しい教授法を、はじめて見聞し、ためになりました。(西豊田中)
- 以下(略)

このアンケートは、数項目にわたり、詳細整理したが紙面の都合上略した。ご返送いただいた諸先生に感謝いたします。

#### おわりに一：

3か年の研究発表としては、まとまりのない内容を申し上げたが、この研究はこれで終わったわけでは決してない。この期間に学び得た幾多のことがらを基盤にして進むのは、むしろこれからである。我々は学者ではない。現場で率先垂範生徒に接し、自信をもってあたるだけの修養、研修、努力をしつづける者である。時代の要求に応じられる心構えと、それにふさわしい指導力を身につけたいと念願している。ELEC の研究協力校としてはずかしい協力の仕方であったが、この間、高橋源次先生、松下幸夫先生、山家保先生、大友賢二先生はじめ、ELEC の全主事の方々に、ご懇篤なご指導を賜わり深く感謝の意を表し、こんごも一層のご教示をお願いする次第である。

(茨城県水海道市立水海道中学校教諭)

# ELEC Forum

## 私の英語教師としての歩み

茨城県水海道市立水海道中学校

荒井 照江

### 英語教員としての生いたち

私は水海道中学校に勤務して2年目になりますが、この2年間、本当に幸福であったと思います。私は地元の中学校、高等学校を経て、1昨年の3月、短大家政科を卒業しました。卒業時に県の教員採用試験を受けましたが、近辺の中学校の家庭科教員となると不足しているところはなく、就職を半ばあきらめておりました。その矢先に母校の水海道中学校から英語担当者が足りないから手伝ってほしいかと依頼されました。これが英語教師として立った私の動機ですが、専門外教科に不安を感じ、決心するまでには相当迷いました。

幸いにして水海道中学校は、Oral Approachの指導法を主唱するELECの研究協力校として2年目を迎えていましたので、毎月1～2回、山家保先生はじめELECの先生方のご指導で校内研究会を開き、指導法の研究に当たっていました。この定期的に行なわれる研究会に臨むためには、毎時の授業を徹底し充実したものになければなりませんから神経を使いましたが、一方楽しみでもありました。と言うのは、研究授業についての卒直な批評は私の研修方法に指針を与えてくれたからです。私個人の研修としては、毎日帰宅後テープを聞くこと、指導略案を作ること、Pattern practiceとOral introductionの部分ノートとして授業後の反省材料にするわけです。また私にとっては自分の力をつけることと共に指導技術を身につけることが大切だと思い、Teaching methodに関する書物を読むことに努めました。専門外教科というので、1年目の1学期間は上司の方々のご理解で週15時間という恵まれた時間をいただきましたので、あき時間には主任の中山先生の授業を初め、英語部員の方の授業を何度も見せていただき、その中から自分なりのテクニクを見出していきました。無我夢中のうちに夏休みを迎えてしまったような気がします。免許状がありませんので少し単位をたろうと思いい、茨城大学で行なわれた講習会へ1週間通いました。

これはリーダーを使っている訳読ですが、単語力に欠ける私には勉強になりました。またELEC主催の講習会には1昨年は東洋英和短大で行なわれた講習会へ、昨年は国際キリスト教大学で行なわれた講習会へ2週間ずつ参加しましたが、本来ならば1st courseから2nd courseに進むのですが、初め相当に無理がありましたので、お願いして昨年も1st courseにはいりました。Lecture以外すべて外国人講師による授業ですから、未経験な私は戸惑うことが多かったのですが、hearing, speakingはもちろん、あらゆる面で勉強になりました。

以上3つの講習会に参加しましたが、どの講習会も受講中に勉強になるばかりでなく、ややもするとマンネリズムになる私にはいつも新鮮な刺激と勇気とを与えてくれたことが最大の収穫であったと思います。

校内の研究方法としては、お互いに自由に授業を参観し合って弱点を補い合ったり、毎日の授業でこの導入はどうしたらよいかなどと忌憚のない意見を出し合っています。

今年度からは小部屋ながらも英語研究室ができましたので、Endless tapeを作り発音矯正やhearingの勉強に努めています。

市内の共同研究としては、初歩的には水海道中学校を中心として同一教科書(New Approach to English)を用いて、同じ部分の指導案を誰もが作り、それについて議論し合う方法をとりました。「3人寄れば文珠の知恵」と申しますが、各々の指導案を見ていくうちにそれぞれの美点、欠点に気づき、良い部分を取り出されて集められた1つの指導案が生まれてきます。また、日頃気づかなかった文法上の間違いを指摘されることもありますし、地域によって生徒の状態も違いますので、お互いに悩んでいることについて話し合うのも学習指導の面で大いに役立ちました。

### 本校での英語授業

次に水海道中学校で行なわれている英語の指導について説明します。この指導法の特徴はhearing, speaking, reading, writingの各領域が50分の授業の中できちんとできるように、学習作業を一定の順序で時間配分し、balanceのとれた完全学習をねらいとしていることだと思います。授業の流れは、

#### A. Review

1. Choral reading
2. Pattern-practice
3. Written test

#### B. Presentation of the new material

1. Oral introduction
2. Mimicry memorization
3. Check of understanding

#### C. Reading and check of understanding

1. Reading of the day's text
2. Check of understanding
3. Writing

## D. Consolidation

このような順序で進みますが、個々の学習作業について説明しますと、授業開始のあいさつを交したならば、前時の教材を教師に従って二・三度 Chorus で読ませ、その学習内容を思い出させます。次に本を閉じさせて Pattern practice にはいりますが、これには基本文型を生徒に示したあと、実物や絵、ジュスチャー、英語の単語などを cue (手がかり) として与え、つぎつぎと場面の変化を示すだけで生徒に素早く全文を言わせる Variation の段階と、situation を明確にしておいてその枠内で生徒に問答させる Selection の段階があります。

Variation の中にも

I have a book. (各自に本を持たせて)

I have a notebook. (ノートを見せて)

I have a pencil. (エンピツを見せて)

Dick has a pencil. (ディックをさして)

というように、主語や目的語や補語、その他基本文の構成要素を占めるそれぞれの位置に構造上の意味の変らない語句を代入していく Substitution の作業と、

He is a teacher. (question)→Is he a teacher?

He is a doctor. (打ち消して)→He isn't a doctor.

You are very lucky. (感嘆文に)→How lucky you are?

というように、語順や機能語を変化させて、肯定文から否定文、疑問文、感嘆文、命令文に変えていく Conversion の作業と、

She can swim. (well) She can swim well.

(very) She can swim very well.

というように、つぎつぎに修飾語句を付加していく Expansion の作業があり、これらを組み合わせて無理のない、しかも意味のある Pattern practice を作るようにしています。Selection ではたとえば situation を There are two books on the desk. とすると、この文を2度位 repeat させた後に

(聞いて下さい) Are there two books on the desk?

(答えてみましょう) Yes, there are. There are two books on the desk.

(How many) How many books are there on the desk?

(答えて) Two books. There are two books on the desk.

というように、生徒から問をひき出すための Cue を与えるだけで生徒に問を言わせ、他の生徒を指名してその場面に基づいて答えさせます。また、situation を明確した後、それについて問う文を教師が言い、生徒に repeat させた後に答えさせる Controlled conversation の方法もとっています。この場合の疑問文は、Variation の段階で生徒が練習したものでなければなりません。次に前時の教材が本当に理解されているかどうかテストします。これは dictation ではなく、絵や実物や英語で場面を示し、それについて応答させる英文を書かせたり、日本語を言って英文を書かせたりしています。1年生は4～5題、2年生は

3～4題、3年生は2～3題程度出していますが、慣れてきますと15～20分位で1クラスを採点できますので、なるべくその日のうちに返し再び復習させています。

次に導入に移りますが、新語や新しい構文のそれぞれを既習の語、既習の構文、誰もが知っている場面という条件を満たした、defining sentences を用いて口頭で導入します。そしてこれを教師について何度も繰り返して言わせ、生徒がすらすらと言えるようになったら、問を出して生徒に答えさせ理解をたしかめます。全部英語でわかる時はよいのですが、抽象的な語や意味の複雑な文で不安な場合には必ず日本語で言わせ、生徒の理解が曖昧にならないように注意しています。この時間(10～15分)で cover できた範囲が新教材の範囲になるわけです。ここで再び本を開き、教師の読みに従って音読やリズムに注意しながら、大きな声ではっきりとそろって早く読めるように choral reading を主に何度も練習させます。これが徹底されたならば、本を閉じさせて生徒が本文をよく理解しているかどうか、本文についていろいろな角度から質問し、これに対する生徒の答えを通じて理解が十分であるかどうかをたしかめます。その後、必要に応じて Writing の時間をとりますが、特に1年生の1学期は新教材の分量を少なめに、この時間を確保するようにしています。Consolidation の時間は学習作業で弱いと思われる点を補強したり、質問を受けたり、次の時間の予告をしています。

## 今後の指導上の工夫

以上のような方法で授業を行なっていますが、これが最良だという考えに立ってやっているわけではなく、悩みつつ、惑いつつ、この指導法を研究しています。ただ2年間この方法を継続してみても言えることは、hearing, speaking, reading, writing という言語学習の手順に則した指導の手順であり、translation を主とするより生徒達は強い興味をもって授業に臨み、英語を学んでいるのだという雰囲気に入るということが出来るのではないかと思います。

以上いろいろなことを述べてきましたが、教師となってまだ日の浅い未熟な私には、まだ生徒1人1人を掌握していくゆとりがありません。今後は、授業中の生徒の管理面を研究し、生徒1人1人の能力、興味に応じた学習指導の工夫をしていきたいと思っています。

また、視聴覚教具を用いて発音面の研修に励むと共に、各種の講習会、研究会に努めて参加し、先輩の方々や諸生の生ご指導を仰ぎたいと思います。





ELEC INSTITUTE.....

## INSTRUCTOR の 横 顔

.....Fred Zavattero

Although I was born in Berkeley, California, we moved when my father started a business in San Jose. Some of my earliest memories are of driving along the California highways with my parents and sisters to visit our grandparents. My uncles who were not much older than I, taught me to play baseball.

During the summer, we used to camp for weeks in the Sierra Nevadas by Bass Lake. I learned to dive and swim here.

The depression years in the United States were difficult for most families, and mine was no exception. I worked at odd jobs before and after school—delivering newspapers, parking cars, washing dishes, and welding in an iron works. One summer, I worked in a gold mine.

Then I started college. My early years of study were interrupted by what I thought would be a short period of army duty. Before World War II, young men in the United States were expected to train for one year in the army. I was planning to leave the army and resume my studies when World War II started. All soldiers were ordered to remain on duty.

I had started as a private. After the war began, I was idly reading the notices on a bulletin board. Enlisted men were being accepted for duty in Engineer Officers' Candidate School (OCS). I decided to apply.

One day, a sergeant called me sternly into his office. I wondered what mistake I had made. Instead of reprimanding me and ordering me on extra duty as punishment for some misdeed, he told me I had been accepted for training at OCS and congratulated me.

At OCS, we "ninety-day wonders" as we were cynically called, were trained in many ways. I volunteered for paratroop duty, intrigued by the hazard of jumping out of an airplane as well as by the extra money offered which we called "jump pay".

On V-E day in Paris, I was a first lieutenant in the paratroops. I had been on active duty for eighteen months in Italy, France, and Germany.

After V-E day, I volunteered for OSS service. I was on my way to another assignment when V-J day came. I decided to leave the army to re-enter civilian life and started school again at the University of California

in Berkeley.

My growing family responsibilities prompted me to leave school although I later returned to the University of Washington. My experiences during nearly five years in the army had not given me much preparation for ordinary civilian life, but I was accepted in the newspaper business. I worked for the *San Francisco Chronicle* then for a large, international newspaper wire service.

For almost fifteen years, I was an executive for this wire service. I travelled throughout the United States and Canada on news stories of international scope ranging from prison breaks, floods, and earthquakes to major sports events and presidential elections. I met Mr. and Mrs. John Kennedy when he was a freshman senator from Massachusetts. I went to Alaska on a special jet with Vice President Nixon and his family and played chess in Palm Springs when President Eisenhower was vacationing there. I was with Queen Elizabeth and Prince Phillip, was introduced to Princess Margaret at a Canadian garden party, and met Mr. Krushchev in San Francisco.

I applied for a transfer to Europe, but I was sent instead to the New York office. I went alone to become accustomed to my new job. A few months later, I returned for my family. As we were preparing to drive across the continent, I telephoned New York and was instructed to go to San Francisco. From there, we were sent to Tokyo.

After a year in Japan, I decided to return to school. I studied at Sophia University and began teaching English as a foreign language. I am now teaching at Japanese universities and ELEC.

My family is also here with me. My wife is teaching English in Japanese universities, and my three sons are attending school. Although we have been in Tokyo four years, we find that each day, we discover new and interesting expressions of Japan and Japanese culture.



## 昭和 40 年度事業計画

財団法人 英語教育協議会

本法人は設立以来すでに第 3 年に入っている。その前身日本英語教育研究委員会時代から通算すると、活動は 9 年に及んでいる。内外各方面の深い理解と熱心な支援のもとに着々発展を遂げ、本年 1 月には、東京都千代田区神田神保町にかねての宿願であった本法人の本部 ELEC 会館の新築落成を見、これを教育ならびに研究活動の中心として、本法人はその目的と使命達成のためいっそう活発な事業活動を展開推進する段階に入った。

以下は寄付行為第 5 条に定める事業項目の順序に従って記述した昭和 40 年度の事業計画である。

## 1. 英語教育に関する研究

この分野において、本法人は ELEC 会館に設けられた研究室を用いて欧米各国で展開されている新しい外国語教育理論と技術を調査研究するほか、日英両語の言語学的分析比較、教材・教授法の基礎研究、中学校・高等学校より大学にいたる英語教育の一貫性の研究等、英語教育全般に関し科学的研究を行なうものであるが、本年度においては服部理事を中心に専門家および外国人インフォーマントの協力のもとに、特に日英両語の比較研究ならびに英語教授法の研究を、前年度に引き続き重点的に行なう計画である。

## 2. 英語教員に対する専門的な講習会の開催

英語教授法の改善と英語教師の資質の向上とが英語教育の進歩のためきわめて重要なことは言うまでもない。この目的のため昭和 32 年日本英語教育研究委員会によって創始され、爾来毎年実施されてきた ELEC 夏期講習会で専門的な訓練をうけた中・高英語教員は昨年までですでに 3,754 名を数えている。本年度においては、その名を ELEC 夏期研修会と改め、中央で 2 回、地方で 2 回開催する計画である。中央開催の分は本法人において直接主催し、地方開催の分は地方の団体が主催し、本法人はこれに対し講師の派遣と技術的援助を行なうものである。これらの研修会の講師は、いずれも英語の教授法における新しい指導理論と指導技術につき経験を積んだ人たちで、しかもその大多数が英語を母国語とする外国人教師であることは、この研修会の伝統であり、特色である。また、本年度の研修会はいずれも合宿制である。

各研修会場別開催要領は以下の通りである。

## A 中央研修会

## (1) ELEC 夏期研修会国際基督教大学会場

主 催	本 法 人
期 間	7 月 28 日—8 月 9 日 (13 日間)
研 修 者	160 名
外人講師	9 名
宿 舎	ICU 男子寮および女子寮

## (2) ELEC 夏期研修会 ELEC 英語研修所会場

主 催	本 法 人
期 間	8 月 12 日—24 日 (13 日間)
研 修 者	160 名
外人講師	9 名
宿 舎	日本学生会館

## B 地方研修会

## (1) 北海道地区研修会

名 称	北海道英語教育指導者講習会
主 催	旭川市教育委員会、その他
期 間	7 月 31 日—8 月 6 日 (7 日間)
開 催 地	旭川市
研 修 者	60 名
外人講師	3 名

## (2) 東北地区研修会

名 称	東北 6 県英語教育指導者講習会
主 催	宮城県教育委員会、その他
期 間	8 月 12 日—24 日 (10 日間)
開 催 地	宮城県鳴子町川渡
研 修 者	100 名
外人講師	4 名

## 3. 英語教員以外の者に対する英語講習会の開催

## (1) ELEC 英語研修所

英語教員を対象とする前項の事業が将来における効果をねらう根本的な計画であるとすれば、この計画はさし迫った必要にこたえようとするものである。すなわち、英語教員のみならず、国際活動に携わろうとする学者、技術者、公務員、会社員、大学生、その他一般希望者に効果的な英語学習の機会を提供し、それによりわが国と諸外国との間の政治、経済、文化等あらゆる面における提携交流の促進に資しようとするものである。

従来は東京都港区麻布の東洋英和女学院短大校舎内に 8 教室を借受けて常設の ELEC 英語講習会 (The ELEC

Institute) を開設実施してきたが、本年1月 ELEC 会館の新築竣工とともにこれを同会館に移し、その名を「ELEC 英語研修所」(英語名は従来通り The ELEC Institute) と改め、その規模ならびに内容をいちじるしく拡張充実するにいたった。すなわち従来夜間のみに限られていた授業は昼間、夜間にわたって、しかも20教室を使って行なうことができるようになり、また多くの新しいコースを設けることが可能になった。

本年度における研修所のコースの編成は次の通りである。

<昼間部>

本科 (前期, 中期, 後期)  
(会社, 官庁等の委託生およびフルブライト留学生研修科を含む)

教員国内留学科

公開講座

婦人講座 (前期, 後期)

中学科 (初級, 中級, 上級)

高校科 (普通, 上級)

特別講座

<夜間部>

普通科 (前期, 後期)

上級科 (前期, 後期)

集中科 (前期, 後期)

教員研修講座

特別講座

研修生の募集人員は次の通りとする。

春学期930名, 秋学期および冬学期それぞれ1,080名  
教師の員数は次の通りとする。

外国人専任講師 24名

日本人常勤および非常勤講師 約10名

(2) 語学練習室

ELEC 英語研修所の施設として、かねて計画を進めていた語学練習室は ELEC 会館4階に4月中旬に工事完了の予定である。同施設は練習室2室(各室30ブース), 調整室, 録音室, 修理室, テープ庫より成り、これに主事1名, 技術員1名, 助手1名を配して、研修所各コース所属の研修生に対して語学練習を行なうとともに、独立のラボラトリー・コースをも設けて施設を十分に活用して研修効果をあげんとするものである。なお、録音室を用いて録音教材の作成を行なう。

(3) フルブライト留学生のための特別研修

昭和38年以来在日合衆国教育委員会(フルブライト委員会)の依頼により毎年フルブライト奨学金受領日本人15名のために実施してきた6週間の特別集中英語研修は、本年度にあっては、すでに本年1月から実施中の15名に対する6カ月の長期研修に加えて、4月以降さらに60名に対し6週間の集中研修を行なうよう依頼をうけたので、本法人ではこれを実施してフルブライト計画による国際交流の有意義な仕事に協力するものである。

(4) 皇太子殿下の英語御研修

東宮職の依頼により、ELEC 英語研修所から外国人専任講師1名を毎日御所に伺わせて皇太子殿下の英語御研修のお相手を勤めしめている件、および東宮侍従および女官11名の英語研修に対しても外国人専任講師2名を交代で毎日1名派遣している件は、前年度に引続き本年度もこれを実施することになっている。

4. 英語教育に関する資料の作成頒布

近代の言語観およびそれに伴う応用言語学の研究成果に基づいた英語教材および資料の作成は、わが国における英語教育の改善と進歩に不可欠の要件であって、本法人は従来からこの分野でも力を注いできたが、本年度における計画は次の通りである。

(1) 中学校英語教科書 “New Approach to English” 改訂版

昭和36年に発行されたこの教科書の改訂版は昭和39年完成し、1年用, 2年用, 3年用の各巻とも同年中に文部省の検定を通過し、近く出版元から発行される。使用開始は昭和41年4月である。

(2) 同上教科書の教師用書および補助教材

“New Approach to English” 改訂版の教師用書として “Teachers' Guide” および “Teachers' Manual” ならびに Picturs Cards, 録音テープ, レコードなどを作成刊行する。

(3) “ELEC Bulletin”

英語教育に関する論文, 記事, 本法人の活動に関する報告等を掲載した本法人の機関誌 “ELEC Bulletin” を本年度中に4回発行する。

(4) “ELEC Publications”

一流言語学者による研究論文, 講演原稿等を掲載し、あわせて本法人の事業活動に関する報告を収録したこの英文刊行物の第7巻を本年度中に刊行する。

(5) “Oral Approach to English” [「オーラル・アプローチ教本」(改訂版)]

Archibald A. Hill 教授の著作である “ELEC English Course, Part I” の改訂版を上記の書名で上下2巻本として刊行し、そのテープを作成する。

(6) “English Conversation Exercises”

Grant Taylor 教授が語学練習室用教材として執筆したこの著作を上下2巻本として刊行し、そのテープを作成する。

(7) “ELEC English Conversation”

ELEC 英語研修所教材委員会で作成したこの教材を Hill 教授の校閲を経て刊行し、そのテープを作成する。

(8) “ELEC Controlled Conversation”

同上委員会で作成したこの教材を同じく Hill 教授の校閲を経て刊行し、そのテープを作成する。

## 5. 英語教育に関する研究に対する援助と助言

近代の言語観に基づいた新しい英語教授法の優秀性を一般に認識せしめて、その普及をはかることは本法人の大きな使命の一つである。この分野における本年度の計画は次の通りである。

### (1) 研究協力校に対する援助助言

ELECの研究協力校となっている下記の3校に対し、定期的に講師を派遣して英語教育に関する援助助言を行なうほか、研究協力校の連絡協議会を開催する。

日本女子大学付属中学校  
茨城県水海道市立水海道中学校  
東京都江東区立第四砂町中学校

### (2) 各地研究会に対する講師の派遣

全国各地の英語教育研究団体等の要請に応じて、講師を派遣して英語教育に関する研究活動に対し援助助言を行なう。

### (3) 英語教育相談

英語教育上の諸問題について英語教員その他から受ける質疑や相談に対し、または面接により回答し、助言する。

### (4) ELEC 同友会活動の推進

中央において ELEC 同友会総会を開催し、地方において地方支部の結成を援助促進するほか、随時講師を派遣して支部の活動に対し援助助言を行なう。

## 6. 語学教育研究諸機関との連絡協力

(P. 31 より) いうことは大体はいえても、それらの文型間に有意差があるかないかという問題は解きえない。そこで、この問題をとくために統計学で使われる分数分布の方法のうちの二頂分数の方法を利用することにした。これは、ある認意のグループを2つとりあげ、そのグループの成員が夫々が人数で、ある一定の時間において検査を受けた時、そのグループ間には有意な差があるかないかをしらべる方法である。これをするため、あらかじめ予測されていたすべての文型中、日本流の  $N_1 + 文 + Vt$  に対意する英語の7文型、 $N_1 + 文 + N_2 + 文 + Vt$  にあたる英語の3文型の2大グループをつくり、その中でそれぞれ順列組合せを行なって、全文型が必ず組み合うようにしておいて計算をした。計算は実に複雑で約2週間を要した。この結果、前に述べた困難度の予測による分類表は1つを除いて信頼度95~99%という高率で正しいことが実証された。一般にこの種の統計の信頼度は85~90%で満足されるべきものである。これは極めて成功であったといえよう。ただ1つ、日本語の  $N_1 + 文 + N_2 + 文 + V$  の文型にあたる英語の  $Vt + N_1 + P + N_2$  と  $Vt + N_2 + P + N_1$  の間には有意差が信頼度75%で認められると出たために、両者に有意差があるとは断定しがたくなった。しかし問題が5題であったから、もっとふやせば別な結果が出たかもしれない。そこでこの場

語学教育に関する学術的ならびに実際的な研究成果の交流をはかるため、内外の諸大学言語研究所をはじめ、各種の語学教育機関との間に刊行物および情報の交換を行なって、緊密な連絡協力を行なう。

## 7. その他目的を達成するために必要な事業

### (1) 顧問の招聘

英語教育に関する本法人の諸事業について外国人言語学者、専門家の助言を得ることはきわめて有意義であるので、本年度においては、9月から滞在1年の予定で米国ウイスコンシン大学準教授 Charles T. Scott 博士を ELEC 顧問として招聘する。

### (2) 職員の在外研究

本年度中に本法人の主事1名に対し6カ月間の予定で在外研究に従事せしめる。

## ELEC 人事往来

◇「春の叙勲」の ELEC 関係者は次の4氏であった。

ELEC 理事	植村甲午郎氏	勲一等瑞宝章
ELEC 評議員	大浜 信泉氏	勲一等瑞宝章
ELEC 評議員	佐藤喜一郎氏	勲一等瑞宝章
ELEC 評議員	高垣勝次郎氏	勲三等旭日中綬章

◇河野守夫氏 4月1日付で ELEC 主事に就任。

◇伊藤和子氏 4月1日付で ELEC 主事に就任。

合だけ同じグループに入れるように予測の表を訂正しなければならなかった。

又、テストの誤答箇所を調査して、次のような結果をえた。誤答の性質を文の形式、つまり語順、形式内の要素におきる具体的な語の選択、その他、及び無解答にわけた。このうち、形式内の語の選択が最も誤答が多く、ことに前置詞の選択の間違いが断然群を抜いていた。前置詞の挿入を忘れたとみえるのは誤答の間違ひの中に入れたので、これを前置詞の間違ひに加算すればいかに日本人にとって前置詞がとり扱いにくいものであるかがわかる。そしてそれが心配のいらぬ英語の  $Vt + N$  ではその間違ひがかえって  $Vt + P + N$  という形式となって現われていたことは、さらにこれを物語っている。次いで形式の間違ひで、これも  $Vbe + Ved + P + N$ ,  $Vbe + Adj. + P + N$ ,  $Vt + N_1 + P + N_2$  などの複雑な文型の前半が  $Vi + P + 文$  といったやや簡単な型に間違えられている傾向が目立った。これは予測の際、主に使った、形式と形式内の要素の選択がまさに適切であったことを裏書きすると共に、意味についてははななくもがなの印象を与えた。以上これをもって本論を終える。ここで扱った領域は日英比較語学では実に小さなポイントにすぎないが更に論をすすめるための出発点として行きたいので、大方の御叱正を得たい。

(都立日比谷高校教諭)

# ◇ 1965 年度 ELEC 夏期研修会 ◇

(The ELEC Summer Program 1965)

## — 受講者募集要項 —

- |   |
|---|
| A. 国際基督教大学会場 (合宿制)<br>7月28日(水)ー8月9日(月)(13日間)    |
| B. ELEC英語研修所会場 (合宿制)<br>8月12日(木)ー8月24日(火)(13日間) |

### ■目的および方法

- (1) 国際基督教大学会場 (合宿制) においては中学校英語科担当教員, ELEC 英語研修所会場 (合宿制) においては中学校・高等学校英語科担当教員を対象とし, 新しい言語学の理論に基づいた英語学習の指導理論および指導技術を体得させる。
- (2) 英語科担当教員の資質, とくに口頭英語の運用能力を向上させる。
- (3) 英語教育に必要な知識を伝達し, 技術を訓練する。
- (4) 受講者は20名ずつのグループにわかれ, 一貫した方針のもとに全期間徹底した集中的演習をする。

### ■役員および講師

役員	会長 高橋 源次	主事 佐藤 貞友
	副会長 清水 護	主事 大友 賢二
	副会長 武藤 義雄	主事 申原 国穂
	主事 山家 保	主事 河野 守夫
	主事 松下 幸夫	主事 伊藤 和子

講師 主任講師以下訓練担当講師としてアメリカ人約10名。講義担当講師として日本人若干名。

### A 国際基督教大学会場 (合宿制)

1. 会 期 1965年7月28日(水)から8月9日(月)まで13日間
2. 会 場 国際基督教大学(東京都三鷹市大沢1500)
3. 宿 舎 国際基督教大学寄宿舍 男子寮および女子寮
4. 会 費 12,800円
 

内訳	申込金	500円
	受講料	2,000円
	宿泊費	3,600円
	食費(1日3食)	6,700円
5. 受講者 第1コース(はじめての参加者) 100名  
第2コース(2回目の参加者) 60名
6. 受講資格
  - (a) 国公立私立中学校英語科担当教員であること。
  - (b) 所属中学校長の推薦を受けていること。
  - (c) 健康であること。

### B ELEC英語研修所会場 (合宿制)

1. 会 期 1965年8月12日(木)から8月24日(火)までの13日間

2. 会 場 ELEC英語研修所(東京都千代田区神田神保町3-8)
3. 宿 舎 日本学生会館(東京都文京区元町1-13)
4. 会 費 12,200円
 

内訳	申込金	500円
	受講料	2,000円
	宿泊費(2食付)	9,700円
5. 受講者 第1コース(はじめての参加者) 100名  
第2コース(2回目の参加者) 60名
6. 受講資格
  - (a) 国公立私立中学校・高等学校英語科担当教員であること。
  - (b) 所属中学校・高等学校長の推薦を受けていること。
  - (c) 健康であること。

### ■受講申込方法

- (1) 国際基督教大学会場  
受講願書(所属中学校長の推薦書を含む)に会費12,800円をそえて申し込むこと。  
申込締切は6月30日(水)。当日消印まで有効。
- (2) ELEC英語研修所会場  
受講願書(所属学校長の推薦書を含む)に会費12,200円をそえて申し込むこと。  
申込締切は7月10日(土)。当日消印まで有効。
1. 申込受付は先着順とし, 定員になり次第期日前でも締切る。
2. 会費納入後受講を取り消すときは, 会費のうち申込金は返還しない。開講後受講を取り消すときは, 会費のうち申込金および受講料は返還しない。
3. 受講願書用紙は10円切手同封の上, 下記申込先宛請求されたい。

### ■申込先

東京都千代田区神田神保町3-8  
英語教育協議会  
ELEC夏期研修会係  
振替口座番号東京 11798  
加入者名 財団法人英語教育協議会  
電話 265-8911(代表)~8916

## ELEC Library 寄贈図書一覧

(1965, 1月~4月)

【寄贈者】	【図書名】
津田塾大	<i>The Tsuda Review</i> No. 1~No. 9
日本ユネスコ国内会	国内ユネスコ関係者団体名鑑
委員	日英対照表現構造論(1)
国広哲弥	<i>British Opinion</i> No. 283, 284
英国大使館	英語英文学研究 第10号
山形英語英文学会	<i>Report on Aural-oral Training in Primary and Lower Secondary School</i>
教育大学	ミカエルだより Nos. 23, 25
聖ミカエル学院	日英温度形容詞の意義素の構造と体系
国広哲弥	英語教育 1月号~5月号
大修館	英語青年 11月号~5月号
研究社	現代英語教育 1月号~5月号
〃	英語教育 2・3月号
三省堂	

## ELEC Library 展示図書一覧

ELEC Library では英語関係図書の展示を行なっております。展示図書の主なものおよび出版社はつぎの通り。

研究社	現代英語教育講座 現代英文法講座 英文法シリーズ 教室英文法シリーズ 英語科ハンドブック その他シリーズ, 単行本, 教科書数十点
三省堂	コンサイス英和辞典 コンサイス和英辞典 その他辞典, 単行本, 参考書, 教科書数十点
開拓社	新英英大辞典 英語教授法辞典 英米語用法辞典 英語類語辞典 現代英英辞典 バンハード英英辞典 その他辞典, シリーズ, 単行本, 教科書数十点
大修館	英語教育シリーズ クエスチョンボックス・シリーズ スタンダード和英辞典 その他シリーズ, 辞典, 単行本十数点
タトル商会	<i>Beginning American English, Mastering American English, Modern Japanese Series</i> その他単行本十数点
学習研究社	英和辞典 マシブック その他辞典, 参考書十数点
好學社	英単語6000とその活用 学習辞典 その他教科書数点
旺文社	英語入門辞典 テープブック その他レコードブック十数点

## 編集後記

- ◇中学校の教科書の採択方式が本年から変わるわけであるが、それに伴って「教科書編集趣意書」なるものが文部省から新たに発行された。これをみてまず目につくのは、点数は12点で現行と同じであるが、その中には全く新しいものが2点、大幅な改訂を加えたものが7点、改訂を加えてないものが3点あることだ。なお現行版の中の2点は消え去っている。
- ◇内容に目を転ずると大部分の教科書に共通な面白い現象が見られる。1.ほとんどの教科書がアメリカ英語を採用していること、2.縮約形を1年の初めから導入していること、3.音声面の指導に力を入れてイントネーションを抜けていること、など口頭練習に重点をおいていることが際立っている。
- ◇また形式面での全般的傾向は、1.教科書を1時間単位でまとめる、2. charts を入れる、3. 色刷りにすることなど視覚的な面での工夫が加えられていることである。
- ◇ここで想起するのは *ELEC Bulletin, No. 1* (1961) の「教科書編集よもやま話」(p. 25) の中で黒田先生がつぎのように言っていることである。「在来の教科書ですと縮約形はあとから教える。初めに完全形を教えていく方式でしたけれども、今度の ELEC の教科書は縮約形から入っていて、あとから縮約しない形に還元していく、そういう教え方をする。これは日本の英語教育に一大改革を加える大事なポイントであると私は信じております。」
- ◇縮約形に限らず3年前に *New Approach to English* が採用した数々の改革的試みが、今日多く教科書に取り入れられていることは誠に喜ばしいことである。
- ◇本号ではELEC会館の開館式を特集しました。G. Taylor 氏の“Language Laboratory Learning”は次号で完結の予定です。
- ◇ELEC同友会の支部が各地で結成されつつありますが、同会の総会は今年秋に開催を予定しております。その際会員名簿を作成しますので、勤務先、住所などに変更のあった方は本部までお知らせ下さい。 Q. Q

ELEC BULLETIN

第14号

定価 80円(送料20円)

昭和40年6月1日 発行

© 編集人

財団法人英語教育協議会

主幹 中島文雄

東京都千代田区神田神保町3の8

電話(265) 8911~8916

発行人

古岡秀人

印刷人

山田三郎太

発行所

株式会社 学習研究社

東京都大田区上池上町264

電話東京(720) 1111

# ELEEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC